

# 大分経済同友会

## スペイン・フランス アートとまちづくり視察報告書

～アート県 大分を目指して～



平成26年3月

大分経済同友会



# 目次

はじめに	2
第1章 視察に向けて	4
第2章 アントニ・ガウディ	5
第3章 都市空間のにぎわいづくり	13
第4章 欧州文化首都	29
第5章 アートの拠点施設	36
おわりに	46
参考資料1 視察スケジュール	47
参考資料2 視察参加者名簿	48
参考資料3 主要参考文献	49

## はじめに

大分県立美術館や大分駅ビルの完成する 2015 年には東九州自動車道全線開通やデスティネーションキャンペーン（以下DC）も行われ観光客含め交流人口が増えることが予想されている。現状、大分市の都心南北軸整備事業のハード整備に関しては中央通りを除けば、駅南エリアはほぼ完成し駅北エリアの実施段階に移行しており、今後必要なのはそれぞれの機能が有機的に連携しシナジー効果を生み出すようなソフト、にぎわいづくりが重要だといえる。

大分経済同友会（以下、同友会）ではこれまで交通まちづくりやアートによる創造都市の実現について調査、提言活動を行ってきた（大分経済同友会ウェブサイト参照）。また現在施工中の大分県立美術館（以下、OPAM）は「世界に通じる美術館」を目指しており芸術文化目的だけでなくにぎわいづくりを含めてまちづくりにまで目的領域を広げようとしている。さらに同友会では OPAM ができることを契機に経済効果や社会的課題解決まで実現するように提言し活動している。今回の視察では、にぎわいづくりに加えてそのような OPAM の目的に合った美術館やアートの事例や 2015 年のDCをふまえた観光の事例などを参考とすべくスペインやフランス各地の視察を行った

スペインのマドリッドでは、ソフィア王妃芸術センターやプラド美術館、ティッセン・ボルネミッサ美術館など過去から蓄積された世界的な芸術作品を鑑賞できる都市観光の魅力を知ることができた。そのような国家的に重要な施設ではないが、数世紀前にレンガ造りで建設された元家畜市場兼食肉処理場をマタデロ・マドリッドという現代アート文化センターに転用し、国立バレエ団からアート展示、結婚式までと、多目的に市民に活用されている施設が印象に残った。建物は外壁を残して大々的に補強工事などを行っており新築した方がコストは安いと思われるが、都市として採算性だけではなく文化的価値を重視し、公共施設に転換したものと思われ、欧州の文化蓄積を続ける強い意志を感じた。我々も経年劣化や採算性というような視点から建築物の寿命を判断するのではなく、永年継続して運営される成熟した都市としてその建物の価値について文化的な判断基準も持つことが必要だと考える。またそのような文化的価値のある建物は都市の魅力に深みを増すことも分かった。大分でも磯崎新が設計した旧大分県立図書館は用途を替え大分市アートプラザとしてリノベーションを行ったことなどが好事例である。同時期に建設されたフンドーキンマンションなども、アートを使った取り組みが全国でも注目されており、マタデロのようなリノベーションの方向性も検討に値する。

バルセロナでは都市観光の中心であるアントニ・ガウディの建築群を視察し、サグラダ・ファミリアでは主任彫刻家の外尾悦郎氏からバックヤードまでご自身にご案内いただいた。建築工事では 3D プリンターで難しい建築部分をモデル化し、一部塔などは RC 造で建設され 2026 年の完成を目指している。全行程が急加速する中、外尾氏の彫刻は芸術性を大切にして丁寧に制作をしており完成時期にこだわっていないことが印象深い。またバルセロナは現在日本サッカーが目指しているスタイル、トータルサッカーで名実共に世界一のクラブチームといえる FC バルセロナの本拠地である。FC は 1899 年に設立され 14 万人ものソシオとよばれる組合員により運営されている。10 万人収容のキャンプ・ノウ・スタジアムには博物館も併設されており、試合日以外も見学できて年間 132 万人も集客する。バルサのモットーは「クラブ以上の存在」という。意味を現地で聞いたところ市民にとって「バルサの選手のように生きる」ことだという。勝ってもおごらず負けても腐らずチームのためにベストを尽くし常に修練し、市民の代表であり、誇りである・・・ということだそう。大分トリニータの今後のあり方にも参考にすべきだと思う。スポーツツーリズムの極致でもあった。



バルセロナのランブラス通りは歩道空間を広げてまちのにぎわいを増した



マルセイユは欧州文化首都を利用し文化・アートの方で都市の活性化をはじめた



付加価値のある観光産業のモデルとなるコート・ダジュール地方

EUは加盟国の文化向上のため毎年「欧州文化首都」として2都市を選定して各種の文化施設整備や事業を行っており、2013年の欧州文化首都に選定されたマルセイユ・プロヴァンス（MP）2013を視察した。マルセイユはフランスで第2の都市だが洗練されていないイメージがあったため、それを払拭し、交流人口も増やす機会として取り組んでいた。「ヨーロッパ地中海文明博物館（MuCEM）」など素晴らしい施設も完成していた。このような文化芸術でまちづくりを行う制度や取り組みは今の日本や大分県にも参考になる。また同時開催のエクス・アン・プロヴァンスではメインストリートの車線を減少させ歩道を広げてカフェなどのにぎわいづくりを行っていた。

大分県は観光振興を目指しており、中でも県都大分や別府を中心とした別府湾岸の観光化が重要だと考える。別府湾岸は風光明媚であり、同様に世界に目を転じると南仏のコート・ダジュール地方が参考になると思われる。カンヌ～エズ～モナコ～マントン～ニースを視察した。紺碧の海岸線沿いの各都市は魅力あるリゾート地で世界一の高級リゾートエリアを形成している。マティス、シャガール、コクトーなど世界的アーティストの作品をコレクションした美術館があり、各都市に芸術の集積もある。そして各都市は、カンヌ映画祭、モナコF1グランプリ、ニースのカーニバルなど大きなイベントから様々な中小イベントまで開催し集客するシステムを持っている。どの都市も高級リゾートエリアと古き良き旧市街エリアとが併設されており、まちの魅力に奥行きをつくっている。買い物ではパリに点在する一流店が軒を連ね、食に関しても同様に三つ星レストランから地元シーフード料理やB級郷土料理まで幅広く楽しむことができ魅力的だ。このように元々は漁師町だった美しい海岸線に、ホテルやビーチなどのインフラを整備し「芸術文化」「食文化」「ショッピング」「イベント」などの「娯楽やエンターテインメント」などを加えてにぎわいをつくり観光化していった手法は今こそ別府湾岸各都市や県都大分が参考にすべきである。DCをよい契機として創造都市を活用した新たな観光産業創出と社会的課題解決にも期待したい。

県都大分のまちづくりも最終段階に入っておりキーワードは、ハード整備では「都心南北軸整備」や「OPAM」「駅ビル」「東九州自動車道」の開業。ソフト整備では「まちなかにぎわいづくり」「観光振興」「DC開催」や各種芸術祭の開催（「混浴温泉世界2015」「国東半島芸術祭」「おおいたトイレンナーレ」「トレインナーレ」など）である。これまで大分には不足していた「文化」「アート」の新しい魅力が集積し、交通整備により大分県、県都大分に多くの人たちが集まりやすくなり「ショッピング」の魅力も増す。よって来年のDC開催も踏まえ、県都大分にも都市型観光振興を目指すべきだと思う。都市型観光に必要な要素は「芸術文化」「食文化」「ショッピング」「娯楽」などがあるが「芸術文化」を中心に高めていきDCで全国にアピールできれば成果も期待できる。

大分市の都心南北軸整備事業は、2013年秋に中央通りの西側車線1車線分の歩道空間を広げて「まちなかにぎわい実証実験」を行い、2014年にはその結果を踏まえ「まちなかにぎわい推進協議会」が設立され今後のまちなかにぎわいづくりのあり方の検討、市長への提言がなされた。まちの回遊性を増すハード整備は大前提だが、この視察内容に見られるまちなかにぎわいづくり、そして大分市の都市型観光振興まで期待したい。2014年年頭に広瀬知事は「芸術文化でまちづくりを行いたい」、釘宮市長は「県立美術館と市立美術館の間（都心南北軸）をアートで結びたい」と語った。2014年は創造都市を実現する最大局面を迎える。同友会もこれまでの視察や提言などが活かされるように活動も行っていく。そして創造都市（クリエイティブ・シティ）の実現を期待したい。



ソフィア王妃芸術センター



# 第1章 視察に向けて

大分経済同友会(以下、同友会)ではこれまで、中心市街地に新たに整備される大分県立美術館(Oita Prefectural Art Museum=OPAM)を核に「創造都市」(文化・芸術による都市再生)を目指すべきことや、歩行者・公共交通を重視した交通まちづくりを進めるべきことを、大分県、大分市などに提言してきた。同友会では、こうした調査提言活動の参考とするために、2011年7月、2012年4月に欧州の創造都市、交通まちづくりの先進事例視察を行い、その成果を報告書にまとめるとともに、提言活動にも活かしてきたところである。

県都大分では、2013年7月に大分市の複合文化交流施設「ホルトホール大分」が開館し、2015年春のオープンを目指してOPAM、大分駅ビルといった文化・都市機能の整備が進んでいる。OPAMは「出会いのミュージアム」「世界の美術と大分の文化がぶつかり合う、大分にしかない美術館」を掲げ、東西の文化、あるいは歴史的芸術と現代アートの出会いの場を目指している。大分市美術館も、2013年7~10月に世界的アーティスト草間彌生の展覧会を開催し、中心市街地と連携した企画展示を通じて10万人を集客するなど、現代アートの魅力を伝える多彩な取り組みを行っている。大分市ではさらに2015年を目指し、トイレをテーマにしたアートフェスティバル「おおいとイレんなーレ」の開催も計画中だ。大分県立芸術文化短期大学でも近年、県内各地で展覧会、ワークショップを開くなど活発な動きをみせている。官・学だけではなく、民間でもアートプロジェクトが進行している。竹町路地裏にあるフンドーキン倉庫が2012年10月にアート系複合スペース「the bridge」として甦り、その向かいに建つフンドーキンマンションでも、2013年10月~14年1月にかけて現代アート展「ART PROJECT OITA 2013 循環」が開催された。NPO法人大分ウォーターフロント研究会は2014年3月に、別大国道沿いのかんたん港、うみたまご前の芝生広場に世界的に有名な絵本作家の荒井良二のアート作品を設置した。

さらに、広く大分県内に目を転じれば、別府では市民文化祭「ベップ・アート・マンス」が毎年11月に催され、2015年には3回目の別府現代芸術フェスティバル「混浴温泉世界」の開催が予定されている。国東半島でも、2014年秋に国東半島芸術祭が開催される予定で、プレ事業としてオノ・ヨーコ、アントニー・ゴームリーらの作品設置が進みつつある。また、国東半島の国見町や竹田市では、過疎化によって生まれた空き家にクリエイターが移住してきて、彼らを中心とした街歩きのアートイベントが行われている。

そしてOPAM、駅ビルの開業、次回「混浴温泉世界」開催が予定される2015年には、JRのデスティネーションキャンペーン(DC)が大分県で実施される。大分DCを好機として、こうした大分の新たな魅力を全国に発信するとともに、個々の取り組みをさらに連携・深化させていくことが重要といえる。

このため今回の欧州視察では、創造都市と交通まちづくりのうち前者に焦点をあて、OPAMを核としたまちづくりのあり方を考えるうえで、欧州のさまざまな美術館を見学することとした。世界に通じる美術館、近現代アートに力を入れた美術館、新しく整備され注目を集めている美術館が、視察先選定の視点である。もちろん、都市のにぎわいづくりには、アートの力だけではなくさまざまな魅力の結集が不可欠である。こうした観点から、美術館だけではなく、あわせてさまざまな都市活性化、魅力づくりの事例もできるだけ巡ることとした。

こうした観点から、スペインのマドリードでは、世界に通じる三大美術館(プラド美術館、ソフィア王妃芸術センター、ティッセン・ボルネミッサ美術館)や都市の公共空間整備プロジェクト(アトーチャ駅舎、マドリード・リオなど)の視察を行った。バルセロナでは、現代アートを中心とした美術館(バルセロナ現代美術館、バルセロナ現代文化センターなど)を視察すると同時に、創造都市として名高いこの街における新旧の都市プロジェクトのあり方を探ることとした。歴史的なプロジェクトとしては、サグラダ・ファミリアに代表されるガウディの建築があり、近年のプロジェクトとしては、ラバル地区やポブレノウ地区の再開発がある。

スペインを後にした視察団は、次に南フランスへと向かった。マルセイユを中心とするプロヴァンス地方は2013年の欧州文化首都に選ばれており「マルセイユ・プロヴァンス2013(MP2013)」のタイトルのもと、各地でさまざまなアートイベントが催されているためだ。視察ではOPAMのプレ事業や開館イベントのあり方を考える参考とするため、MP2013本部を訪ねて話を伺うとともに、幾つかのアートプロジェクト(グラネ美術館など)を実地に見学した。同じく南仏のコート・ダジュール地方では、ジャン・コクトー美術館(2011年開館)やマルク・シャガール国立美術館、さらには観光都市として知られるモナコやカンヌ、ニースの視察を行った。

同友会としては、大分の今後の地域活性化のあり方を考えるための参考として、今回の視察から得られた経験・知見を活用してまいりたい。

## 第2章 アントニ・ガウディ

「アントニ」と、カメラを手にした人が声をかける。そうすると、彼の前に立つ視察団の面々が「ガウディ！」とにこやかに声をあげる。外尾悦郎氏に教えてもらったバルセロナ版の「はい」「チーズ！」である。

言うまでもないが、アントニ・ガウディ（1852～1926）とは、バルセロナ出身の世界的建築家。サグラダ・ファミリア（聖家族贖罪聖堂）、カサ・ミラ、グエル公園など、市内には彼が設計した個性的な建築が数多く残されている。特にサグラダ・ファミリアは、スペインの観光パンフレットやガイドブックの表紙になることも多く、バルセロナはもとよりスペイン観光全体のシンボルと評してもよい。この教会はまた、1882年に着工して以降、今なお建設の途上にあることでも知られている。

そして外尾悦郎氏は、この聖堂の建造に携わる主任彫刻家である。日本人でありながら、1978年にバルセロナに渡って以降、長年にわたり聖堂で彫刻の仕事をしてきた。今回の視察では、この外尾氏に現地でお会いして、彼の口からガウディの生きざまと大聖堂に込められた思いについて直接話を伺うという貴重な機会に恵まれた。

報告書の構成上、この章の内容は形式的にはバルセロナのまちづくりの一部をなすものだが、機能・デザイン・象徴を一体的に捉えるガウディの先見性や、サグラダ・ファミリアの完成を長期的な視点から捉える必要性を説いた外尾氏の話は、今回の視察報告書全体に通じる哲学として、報告書の背骨となる内容だと感じたため、別に一章を構えて採りあげることとした。



サグラダ・ファミリアはスペイン観光のシンボル



サグラダ・ファミリア主任彫刻家 外尾悦郎氏



自治独立の気風を持つカタルーニャ地方

### 1. カタルーニャ小史

#### （1）自治独立の気風に富むカタルーニャ州

ガウディについて語る前に、まずは簡単にこの地域の歴史を紹介しようと思う。バルセロナは、スペイン北東部に位置するカタルーニャ州の州都で、バルセロナ県の県都でもある。人口は160万人にのぼり、スペイン国内では首都マドリードに次ぐ第二の規模を誇る。

カタルーニャ州は、前回視察で訪れたバスク州とともに、スペイン国内でも特に自治・独立の気風が強い地域である。言語的にも、スペイン語と異なるカタルーニャ語（català）が母語となっており、ほぼ全員がカタルーニャ語とスペイン語を話せるバイリンガル。バルセロナの書店で見かけた本や、カタルーニャ関係のウェブサイトを覗いてみても、カタルーニャ語とスペイン語の二言語表記がなされているケースが多かった。

カタルーニャは中世、カタルーニャ・アラゴン王国として繁栄したが、1479年に隣国カスティーリャ王国（スペイン）のイサベル女王と婚姻関係にあったフェルナンド2世が国王に即位したことから、実質的にカタルーニャがカタルーニャ・アラゴンを併合することとなった。1714年にはスペイン継承戦争での敗北により、カタルーニャは自治権を失い、カタルーニャ語の公的使用も禁止される。その後もカタルーニャでは、自治と被支配をめぐる争いが続いたが、第二次大戦後もフランコ独裁政権のもとでカタルーニャの自治・言語・文化は厳しく弾圧を受けた。カタルーニャの自治拡大が進むのは、フランコが死去した1975年以降のこととなる。

## (2) 地中海都市バルセロナの発展 (19 世紀まで)

地中海に面する都市バルセロナは、紀元前に築かれたローマの植民都市を起源とし、中世には市壁を広げて市街地を拡張しながら地中海交易で発展を遂げてきた。しかしながら、前述したイベリア半島の政治情勢に加え、地中海時代から大航海時代へと移り変わる中で、経済面でもマドリードの後塵を拝する時代が続いた。

その後、18 世紀後半にはカタルーニャ人にも新大陸貿易が解禁されたことから、バルセロナは、政治・文化面で抑えこまれながらも、経済面ではふたたび活気を取り戻していく。工業化にともなう経済発展により、19 世紀半ばのバルセロナは、市壁に囲まれた 3 km<sup>2</sup>ほどのエリア (現在のゴシック地区、ラバル地区に相当) に 15 万人以上が住む過密都市となり、生活環境の悪化が大きな問題となっていた。このため、市壁の撤去と都市エリアの拡張が計画され、1859 年に土木技師イルデフォンズ・セルダ (1815~76) の都市計画が採用された。セルダの案は、旧市街を取り巻く拡張地区に、113.3m 四方の正方形の街区を基盤目状に並べた近代的なもので、このプランが現在もなおバルセロナの都市構造を基本的に規定している。

## (3) モデルニスモの建築

こうしてバルセロナの都市エリアが拡張された 19 世紀末、新たに生まれた市街地で建築に腕を振ったのが、モデルニスモの建築家たちである。モデルニスモをそのまま英語に訳すとモダニズム (近代主義) となる。建築の分野でモダニズムといえば、通常はル・コルビュジエ、フランク・ロイド・ライト、ミース・ファン・デル・ローエ、ヴァルター・グロピウスなど、20 世紀前半に活躍した建築家のイメージが強い。華やかな装飾を排し、直線や立方体といったシンプルな構造を用いた機能的・合理性重視の建築である。

これに対してカタルーニャのモデルニスモは逆に、装飾は過剰気味で、曲線や自然のモチーフを多用しており、モダニズム建築とはまったく風合いが異なる。モデルニスモはむしろ、19 世紀末に流行したフランスのアール・ヌーヴォー、ドイツのユークェント・シュティール、オーストリアのウィーン分離派と軌を一にする流派なのだ。アール・ヌーヴォーの流派は、それが展開した地域も広いが、対象ジャンルも建築、絵画、彫刻、工芸など多岐にわたる。代表的作家を 1 名だけ挙げるならば、さしずめアルフォンス・ミュシャであろう。ブルジョアジーの台頭を背景とし、新素材の活用にも積極的であったアール・ヌーヴォーも近代的なムーブメントには違いないのだが、その後に来たモダニズム建築のテイストとはかけ離れている。

モデルニスモの代表的建築家としては、ルイス・ドメネク・イ・モンタネール (1849~1923)、ジュゼップ・プーチ・イ・カダファルク (1867~1956) の名が知られている。モンタネールの作品としてはカタルーニャ音楽堂、カサ・レオ・モレラ (レオ・モレラ邸) などが、カダファルクの作品としてはカサ・アマトリエ (アマトリエ邸)、カサラモナ工場 (現カイシャ・フォーラム) などが有名だ。こうしたモデルニスモの建築家の中にアントニ・ガウディの名も加えるのが一般的 (岡部 2010、Giordano, Palmisano 2012 など) だが、ガウディをモデルニスモに含めることには抵抗を感じるとの意見もある。「曲線や自然のモチーフの多用など共通点があるものの、その独創性は一つの歴史的様式に収まり切らない」(田澤 2013) というのだ。私たち視察団がガウディの建築を実見した感想としても、たしかに彼の独創性は他と隔絶しているように感じられた。私たちのそうした漠然とした印象に回答を与えてくれたのが、外尾悦郎氏である。

## 2. サグラダ・ファミリア

視察団がサグラダ・ファミリアに外尾悦郎氏を訪ねたのは 6 月 10 日のことで、まったくの偶然ながらこの日はガウディの命日にあたっていた。本節では、そのおりに外尾氏から受けた説明をベースとしつつ、外尾氏の著作 (外尾 2006) やその他の文献資料などから得た情報を適宜補って報告を行う。したがって、外尾氏の意図と異なる記述や事実の誤認などがあれば、それらはすべて筆者の責に帰するものである。

### (1) 生誕の門

サグラダ・ファミリアは、イエス降誕から青年期までの物語を描いた東向きの「生誕の門」、エルサレム入城から磔刑までを描いた西向きの「受難の門」、最後の審判や天地創造の物語を語る南向きの「栄光の門」(工事中) という三つのファサードから構成される。生誕の門はさらに、キリストの三徳を象徴する「希望」「慈愛」「信仰」という三つの扉口からなる。視察団は外尾氏と、彼が彫刻を手がけた生誕の門の前でお会いした。そこで記念写



真を撮影したときに教えてもらったのが、本章の冒頭に記した「アントニ」「ガウディ！」という掛け声である。

外尾氏がバルセロナに渡ったのは1978年、まだ「洋行」という言葉が残っていた時代である。サグラダ・ファミリアを訪れたところ、傍らに石材の山が積まれていた。彫刻家を目指していた彼は、大胆にもその場で、石を彫らせてほしいと掛け合ったという。最終的にサグラダ・ファミリアで彫刻する者を選抜する試験を受けた彼は、地元を中心に約60名が応募した試験を突破して採用され、以来35年間にわたって大聖堂の彫刻を彫り続けることとなった。当時未完成であった生誕の門で、外尾氏はハーブを奏でる天使像をはじめ数多くの石像を彫り続け、2000年に門は完成をみた。

この門には「嬰兒虐殺」<sup>1</sup>の光景を描いた彫像がある。腕に赤子を吊りあげたローマ兵に、母親が取りすがる。彼女の足下には他の幼児の死体も横たわっている。ガウディは当時、地元で嫌われ者だった男をローマ兵のモデルにしたようだ。さらに幼児のモデルを見つけるため、友人の医師を介して亡くなった赤子を手に入れ、石膏で型取りをしたという。ガウディはそこまでしてリアリティを追求した。そうでなければメッセージが後世に伝わることはないし、逆に、人間が真に伝えようと欲するならば、それは百年後にも伝わるのだ。

生誕の門にはまた、幼いイエスを連れて迫害を逃れるマリアの彫刻もあり、彼女が乗る驢馬にもモデルが必要となった。当初は品評会で1位を獲得した驢馬を連れてきたところ、ガウディは違うと言って、痩せた驢馬を連れてこさせた。石膏取りされる驢馬を前に持ち主の老婆は泣き叫んだそうだが、そのおかげで優しげな面持ちをした驢馬の石像が生まれた。

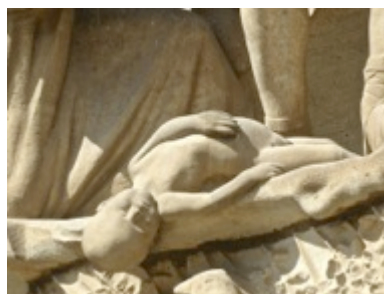
生誕の門の慈愛の扉口の真ん中に立っている柱の上には、馬小屋で誕生したばかりのイエスと、マリア、ヨセフの聖家族の像が載っている。この柱の表面には螺旋状に文字が刻まれており、この文字は、アブラハムからヨセフに至る聖書に記された人間の系図を示している。その柱の周りをデザイン化された金属の網が覆っているが、この網は柱に刻まれた文字を保護するだけでなく、象徴としても重要な意味を持つ。金網の下部にはエデンの蛇がおり、私たち人間は原罪から逃れられないことを示すとともに、柱の上部に、その罪を贖うために地上に送られたイエスの生誕風景を配置している。「そのことに気づけ」というのがガウディのメッセージである。

また、生誕の門を構造的に補強する二本の柱の下には、その柱を背負う海亀と陸亀の彫刻がある。この彫刻は柱の台座となっているだけではなく、雨樋としての機能も果たす。さらに「サグラダ・ファミリアを亀のようにゆっくりとでも、休まずにつくり続けていこう」というメッセージを伝えるシンボルにもなっている。

このように、ガウディの天才性は「機能」と「デザイン（構造）」と「象徴」を常に一つの問題として同時に解決していることにある。



赤子を吊りあげたローマ兵に母親がすがる像



亡くなった赤子から石膏で型取りをした



マリアの乗るやせた驢馬も石膏で型取りされた

## (2) ロザリオの間

生誕の門を通過して、視察団は次に「ロザリオの間」へ案内された。ロザリオの間は、ガウディの生前に唯一完成していた内部空間であったが、1939年に勃発したスペイン市民戦争の中で焼き討ちに遭い、長らく閉鎖されていた。ここに保管されていたガウディの図面もことごとく焼失した。1980年に、このロザリオの間の内部空間の修復を外尾氏は任され、この部屋は外尾氏の最初の工房になった。

ロザリオの間には幼子イエスや聖母マリアの像があるが、聖書には関係のない「爆弾を持った若者」の像もあった。格差社会の当時、資本家を憎んで無政府主義に走った若者が、悪魔にそそのかされ爆弾を手取る姿であ

<sup>1</sup> 新約聖書のエピソードで、バツレヘムに新しい王（イエスを指す）が生まれたと聞き、怯えたユダヤのヘロデ大王がバツレヘムの2歳以下の男児を虐殺させた事件。

る。しかし、若者の指先が爆弾からわずかに浮いている事実に気づいた外尾氏は、爆弾を受け取ろうとした若者は、マリアの姿を見て一瞬躊躇ったのだと解釈した。そこで外尾氏は、損なわれていた彫像の顔を修復する際、悪魔に憑かれた狂気表情ではなく、正義感が強いだけに悩みも深い青年の迷いと苦しみを彫ったという。

また、ロザリオの間には若者と対になって「祈る少女」の像もあったことが判明した。悪魔に金貨で誘惑される少女の姿を彫った像である。彼女が求めるのが何なのかによって、少女の表情は変わると外尾氏は考えた。宝石や洋服が欲しいといった単なる個人的欲望では、正義感からテロに走ろうとする若者像との釣り合いが取れないと考えた外尾氏は、少女に宿るのは隣人への優しさだと判断した。たとえば、隣家の病気のお婆さんの回復を祈っているのかもしれない。その優しさに悪魔が付けこんできたのだと解した彼は、優しさと弱さ、誠実さと背徳心が入り交じった切実な表情を彫ることにした。別名を「誘惑の間」というロザリオの間は、正義感や優しさを単によいものと思いきむだけでは決して解決しない、人間社会の難しさを彫りこんだ空間なのだ。

ちなみに、ロザリオの間の窓にある螺旋円柱は、サグラダ・ファミリアでもっとも細い柱である。この柱の修復を通じて分かってきたのは、ガウディのデザインは、一見して複雑そうで、実はみごとに単純化されたプロポーションに基づいているという発見である。この柱に彫られた螺旋状の筋は、円弧上を10cm進むと隣の筋があった位置に進み、一回転半すると元の場所に戻る。複雑なデザインを、高等教育を受けていない職人がいかに習得できるようにするかが、ガウディの重視したところである。紙の図面は戦争で焼かれても「図面が石の中に込められている」のだ。現代ではコミュニケーションのための機材こそ増えたが、愛する人に思いを伝えるにはどんなに高度な道具でも足りない。図面やパソコンのメモリーという道具に囚われず、未来の人々にいかにコミュニケーションするかが大切だと外尾氏は語る。



ガウディの生前で唯一完成されたロザリオの間



聖書にはない悪魔から爆弾を渡される若者



生誕の門慈愛の扉口にはガウディのメッセージが

### (3) 聖堂内部

次に聖堂の中心部へと案内された視察団は、その2階へと登った。そこには、聖歌隊2千人分の席が設けられており、ここから見おろす聖堂内の風景は実に荘厳なものであった。聖歌隊席からは2千人のコーラスが聖堂内に響く。1階にいる人々にしてみれば、それはあたかも天界から音楽が降り注ぐかのように聞こえるだろう。

外尾氏によれば、サグラダ・ファミリアは建築というよりも巨大な楽器だという。サグラダ・ファミリアには最終的に18本の塔が聳えることになるが、そのうちの12本(十二使徒の塔)は鐘楼としてつくられている。生誕の門には84本の鐘が吊され巨大なピアノとなり、受難の門はパイプオルガンとなる。栄光の門に関しては、ガウディが最終案を残す前に他界してしまったが、打楽器系の楽器にしようとしたと推測される。ガウディは他人と話すのが苦手だったが、サグラダ・ファミリアを設計するために、自ら聖歌隊に入って音楽の勉強を基礎から行った。古のピタゴラスの数学は音楽に由来すると伝えられるが、ガウディの建築もまた、数学的にして音楽的な産物なのだ。

聖堂を支える柱と柱の間隔は、基本的にすべて7.5mである。身廊、側廊の部分だけ、1本抜いた15mの距離となっている。7.5mという中途半端な長さと思われるかもしれないが、カタルーニャでは古くから歩測で距離を測る際の1歩分を約75cmとしており、これは世界的にも共通している。

また、聖堂の柱は底面では六角形であったのが、いつの間にか十二角形となり、やがては二十四角形になるなど、上に行くほど角が増えて円柱に近づいていく。二重螺旋の運動に基づいて生み出されるこうした造形をガウディは、自然、特に植物から学んだと外尾氏は推測している。現代社会では、自然との調和といったことが重視されるが、ガウディははるかに時代に先んじていた。わが国を代表する宮大工であった西岡常一棟梁が「木に学べ」と語ったように、こうした文化は本来、日本にもあったものである。そうした意味で、ガウディは西洋人と



しては異質だといえる。コンピュータもない時代に、一人の人間の頭の中にこうしたアイデアが詰まっていたのは、たいへん不思議なことである。

ガウディは、1898年から1908年にかけて「コロニア・グエル教会の逆さ吊り実験」を行った。天井から両端を固定した糸を幾つも吊り下げ、その先に錘（おもり）をぶら下げる。この構造を上下反転させた形態を建物のアーチとすると、建物の自重を自らのかたちだけで支えるうえでもっとも無駄のない構造となるのだ。サグラダ・ファミリアも、この実験の応用としてデザインされている。建築は、引力に負けるに決まっている。ガウディは、人の知恵とは、引力と戦うことではなく、自然の力に寄り添いながらそれを活かしていくことだと考えた。自然への従順な気持ちが人間の力を引き出すという、未来の智慧がここにはある。



建築の工房では建築部分の大小のモデルを作っている 3Dプリンターも活用されている

#### （４）外尾悦郎氏の工房にて

最後に外尾氏は、工房として現在使っている場所に私たち視察団を案内してくれた。彼はそこで、生誕の門の門扉制作に取り組んでいるのだ。ガウディがデザインしたわけではない門扉を門に設置する許可を得るには時間がかかったが、2016年のクリスマスには門扉を設置できる運びとなった。高さ4.5mの扉20枚をつくる必要があるという。工房には、現在制作中の門扉の原型が置かれていた。シリコン製の原型から蠟型をつくり、最終的にブロンズ製の門扉を鋳造する。ブロンズは、錆びさせ次第であらゆる色彩を表現できる高貴な素材であり、五百年は保つ。本来は日本で門扉をつくりたかったが、距離があるためマドリッドで制作することになった。日本の技術なら門扉を一枚もののでつくれたが、マドリッドでは、五分割してつくったものを一つに組み合わせる必要があるという。

慈愛の扉口の門扉は蕁をデザインし「枝と枝が重なりあい夫婦のように支えあう」という意味を込めた。蕁の葉の裏側に潜む昆虫には、この場所が虫にとっての安全地帯であるという意味が隠されている。希望の扉口の門

扉にはアヤメと百合、葦をデザインした。流されてもそこで芽吹く植物であることから、常に希望が存在することの象徴となる。ガウディの残したデザインが存在しない門扉ではあるが、彼ならどうデザインしたかを自問しつつ、門扉の象徴する意味を考えながら制作している。



外尾氏の工房を視察



ガウディの鉄板をねじった使い方は大分のフンドーキンマンションにも継承されている



2026年完成を目指し鉄筋コンクリートで建設されているが「神は急がない」と外尾氏は語る

### （５）ガウディとモデルニスモ

外尾氏に、ガウディはモデルニスモの建築家に含まれるかを尋ねたところ、「まったく違う」という答えが返ってきた。モデルニスモはアール・ヌーヴォーやユグェント・シュティールと同時代のもので、東洋の魅力を発見するブームの中から生まれた。北斎など日本の伝統的芸術の中に、欧州は新しさを見いだしたのだ。ガウディもたしかにそうした時代に生まれたのだが、彼の芸術はアール・ヌーヴォーとは違う独自のものである。日本の美は、自然を捉えて独自のアートに昇華したが、アール・ヌーヴォーの作品の多くは、花柄や動物の体つきなど、自然の表面的な姿をモチーフとするのにとどまっている。一方、ガウディはそこを突き抜け、自然が持つ目に見えない力を直接捉えた。目に見えている自然の向こうに、目に見えない秩序を読み取り、それを建物の構造に活かそうとしたのが、ガウディである。

近年、ミニマリズムがふたたびブームとなっている。直線的な効果を重視し、シンプルの中にすべてを見るこの潮流も元来、一畳一間を人間の寸法とする日本建築に由来する。ガウディの思想はこうしたミニマリズムとも似て非なるものである。単にシンプルなミニマリズムと異なり、ガウディにあっては、シンプルにみえてすべてのものがつながっている。ガウディは自然そのものに学び、目に見えない自然の力を抽出するとともに、そのデザインを職人たちが彫ることができるよう工夫した。

### （６）神は急がない

サグラダ・ファミリアは現在、その大部分を石ではなくコンクリートで建設しているが、外尾氏はそれに反対して石造を主張してきたという。日本のトンネル崩落事故に象徴されるように、コンクリートは百年程度しか保たないが、サグラダ・ファミリアの建築部門は、その事実気づいていないふりをしている。また、受難の門の彫刻は、カタルーニャ人の彫刻家ジュゼップ・マリア・スピラクスが担当したが、スピラクスはガウディのデザインを無視して、自分で考えたデザインに変えてしまった。ガウディのデザインと大きく異なる抽象的で近代的な彫刻は、地元でも賛否両論だという。

さらに、サグラダ・ファミリアの建築部門の責任者は、2026年までに聖堂を完成させると言っている。なぜ2026年かといえば、ガウディの没後百年記念にあたるからだ。しかし、そもそもサグラダ・ファミリアの完成とはいかなる状態を指すのだろうか。教会は人を幸せにする「道具」だといえるが、その道具はいつをもって完成したといえるのか。実は、教会をつくるプロセス自体が道具なのであり、そこから何を学ぶかが重要なのだ。建築物には施主（オーナー）がおり、建築家はオーナーに満足してもらう必要がある。それでは教会のオーナーは誰かといえば、神である。オーナーである神を幸せにするには、どうすればよいか。親の幸せは子どもが幸せな顔をする。すなわち、神（親）が幸せになるには、すべての人々（子）が幸せな顔をするのである。

そのように考えれば、2026年という完成目標は、あくまで人間が自分たちの都合で設けたものに過ぎない。教会のオーナーである神は、決して急がない。重要なのはつくり続けるという意志を持つことである。建物の完成はさておき、彫刻については2026年という期限は眼中にはなく、何百年かかっても、よい彫刻を聖堂に載せていく。外尾氏の仕事は、その行く末を見つめ続けていくことだという。



### 3. カサ・ミラとグエル公園

今回の視察ではガウディの設計した建築として、サグラダ・ファミリアの他にカサ・ミラとグエル公園も見学しており、それらの概要について以下に記す。

#### (1) カサ・ミラ

セルダの都市計画に基づき、それまでバルセロナ市外の野原であったエリアが、道路が基盤目状に走る広大な市街建設用地として整備された。こうして生まれた拡張地区に競って建物を建てたのが、当時の新興ブルジョア階級であった。これらの建築のうち、バルセロナの実業家であったペレ・ミラがガウディに依頼した建物が、1906～10年にかけて建造されたカサ・ミラ（ミラ邸）である。

カサ・ミラが面するグラシア通りは、カタルーニャ広場から北西に延びる目抜き通りで、現在では、高級ブランド店や洒落たレストランが建ち並ぶ一大ショッピング街となっている。開発の経緯からも分かるように、グラシア通りの沿道には、ガウディ以外にも、当時のカタルーニャで腕を振るったモデルニスモの建築家の作品が残されている。ガウディの作品であれば、繊維業を営むバトリョ家の依頼で彼が増改築を手がけたカサ・バトリョ（バトリョ邸）があり、それと軒を競うようにカダファルク設計のカサ・アマトリエ、モンタネール設計のカサ・レオ・モレラが並ぶ。当時のライバルであった建築家三人の設計した邸宅が立地するこの一角は、ギリシア神話にちなみ「不和のりんご」と呼ばれる。また、グラシア通りから脇道に少し入ったところにあるアントニ・タピエス美術館も、モンタネールが設計した出版社建物を美術館にコンバージョン（用途転換）した施設だ。

さて、肝心のカサ・ミラだが、地上6階、地下1階に加えて、洗濯場や収納庫を納める屋根裏も備えた集合住宅で、波打つ壁面のデザインはきわめて独創性に富む。一見してデザイン重視の設計にみえるが、壁面に剥き出しにした柱や天井梁で荷重を支え、室内は住民ニーズに合わせて内部レイアウトを自由に決められる画期的な構造設計がなされている。屋上には奇怪な彫刻群が立ち並ぶが、これらのすべてに煙突や換気塔、階段室といった役割がある。機能・デザイン・象徴を常に一つの問題として捉えるガウディの面目躍如といったところだ。

あまりに革新的な建築であったため、当時のバルセロナでは評判が悪く、ファサードが石の塊のようにみえたことから「ラ・ペドレラ（石切場）」と市民に揶揄されたが、現在はバルセロナを代表する歴史的建築として観光名所になっている。名所とはいえ、カサ・ミラの住宅の多くにはいまだに住人が住んでおり、観光客が自由に出入りできるのは、1階（受付、ミュージアムショップ）、見学用住居フロア1層、屋根裏、屋上などに限られる。

カサ・ミラを設計した後、ガウディはサグラダ・ファミリアの建築に専念していくため、この建物はガウディが手がけた最後の民間建築となった。

#### (2) グエル公園

グエル公園は、ガウディの生涯を通じて最大のパトロンであった実業家エウセビ・グエル（1846～1918）の依頼により設計された公園である。グエル公園はもともと、自然と共生した住環境を生み出す実験的なまちづくりプロジェクトとして計画された。緩やかに起伏した丘陵地帯に60戸の庭付き住宅が並び、ミュージアムや運動場も併設されるという田園都市の開発計画であったが、残念ながら分譲住宅は2戸しか建たず、そのうち1戸はガウディ自身の住居であった。結果的に、開発は1914年に頓挫し、22年にバルセロナ市に寄付されて市営公園として活用されることになった。グエル公園が立地する地区は、今でこそ周囲に住宅が建ち並ぶ市街地だが、造成当時は郊外エリアであり、分譲住宅地としての需要は小さかったようだ。

グエル公園の正面入口には童話に出てくるような守衛小屋が佇み、そこから先に上りの大階段が広場まで続いている。この階段の上部に据えられているのが、グエル公園のシンボルといえるドラゴンの像である。その先にある広場空間は二層構造となっており、ドーリア式の列柱に支えられた下層部は、屋根付きの市場として活用される計画であった。集会所兼レクリエーション広場として設計された上層部の中央広場からは、バルセロナの市街地と地中海を一望することができる。広場の外縁は、波打つような曲線を描く長いベンチに囲まれている。

このベンチやドラゴン像、市場空間の天井部分など公園の随所は、陶器やタイルの破片を組み合わせたモザイク模様で覆われているが、これらの破片は基本的に廃棄物をリサイクルしたものである。これらのモザイクが織りなす色鮮やかなパターンはグエル公園の大きな特色となっており、破片という素材のリサイクルにとどまらず、破片の紋様が組み合わさり新たな絵柄を生み出すという意味で「デザインのリサイクル」にもなっている。

ちなみに、グエル公園の入場料金は従来無料だったが、公園が大勢の観光客で飽和状態にあり、また、施設維

持費に充てるためもあって、2013年10月より有料化する予定とのこと。もっともこの公園は観光客だけでなく、一般市民もジョギングなどで利用することから、有料化には反対意見も根強いと聞いた。



ガウディの建てた集合住宅カサ・ミラ



独創的な壁面が気持ちを引きつける



建物内部は中央部が吹き抜け



吹き抜けに面する各戸に光があたりやすい



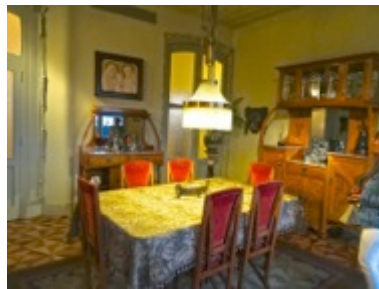
屋上には奇怪な彫刻が並ぶ



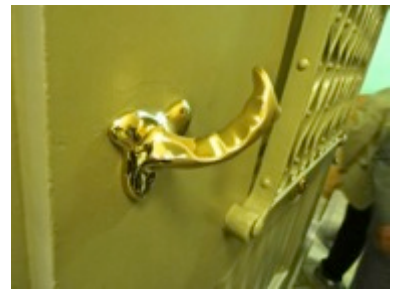
屋根裏が展示スペースとなっている



住居フロア1層が見学用で入室可能



家具や照明もガウディの作品が展示



ドアノブもアート作品のようだ



当初は実験的な住宅団地として開発されたが最終的に市営公園となったグエル公園



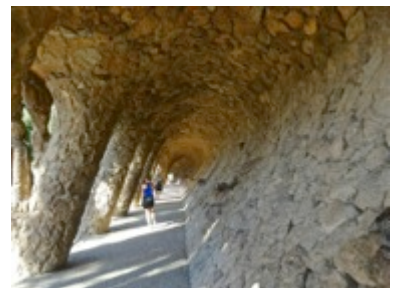
陶器やタイルの破片を組み合わせたモザイクが特長



広場空間を支えるドーリア式列柱



童話に出てくるような守衛小屋



不思議な園路



## 第3章 都市空間のにぎわいづくり

アートや文化に焦点をあてた報告は、次章以降で行うこととして、本章では主にまちなかの再生や魅力づくりの事例について説明したい。

なお、今回は交通まちづくりの事例を体系的に視察することはなかったが、欧州諸都市を巡るとその状況が否応もなく目に入ってくる。このため、交通まちづくりに関する取り組みについては、それぞれの都市の項で付言することとした。ちなみに今回の視察先で、LRT（次世代型路面電車）<sup>2</sup>を導入していたのはバルセロナ、マルセイユ、ニースの各都市である。レンタサイクル・システムはバルセロナ、マルセイユ、カンヌ、モナコ、ニース、パリ、ミニトレイン<sup>3</sup>は、マルセイユ、カンヌ、モナコ、マントン、ニース、パリで見かけた。

### 1. バルセロナ

前回の欧州視察では、スペインの創造都市ビルバオを訪れたが、今回視察したバルセロナもまた創造都市として世界的に知られている。バルセロナは、疲弊した中心市街地に広場などを生み出す「スポンジ化（多孔質化）」を推進し、そうした公共空間をにぎわいの場としていった。「バルセロナ・モデル」と称されるこの取り組みは、中央通りの社会実験を行った県都大分にもある程度参考になると思われたため、民主化後のスポンジ化により再生が図られた旧市街ラバル地区や、面的再開発が進んだポブレノウ地区などを中心に視察を行った。

#### （1）地中海都市バルセロナの発展（20世紀以降）

ガウディ（1926年没）以降のバルセロナでは、1929年のバルセロナ万博にともないモンジュイックの丘を中心とする地区の開発が進んだが、同年に起きた世界大恐慌を経て、欧州全体をファシズムの影が覆っていく。スペインでも、市民戦争を経てフランコ独裁政権が樹立され、カタルーニャの自治・言語・文化は厳しい弾圧を被る。その一方で、压制下で治安は保たれ労働者の権利も抑制されたことから、経済活動は活発で、スペイン全土からバルセロナに人口が流入し、セルダの計画エリアを超えて市街地はスプロール化し、バラック建てなどの劣悪な環境の居住地区も生まれた。

こうしたバルセロナの状況が変化するのは、フランコが死去した1975年以降のことである。バルセロナ市長パスクアル・マラガルと、市の都市計画局長に就任した建築家オリオル・ボイガスのもとで、公共空間が不足していた周縁・郊外地区に公共空間を創出する取り組みが進められていく。都市の全体計画を定めて個別事業にブレイクダウンする「全体から部分へ」という都市計画の常道に対して、地域住民のニーズに迅速に応じて公共空間を整備する「部分から全体へ」という取り組みが図られたのだ。こうして生まれた広場や公園には、斬新な都市デザインが施され、モニュメンタルなアート作品なども設置されることで、バルセロナの都市再生は「バルセロナ・モデル」として世界から注目を集めるようになった。

そして1986年、バルセロナへのオリンピック招致が決定する。1992年の開催に向けてさまざまな公共事業が実施された。バルセロナの旧市街と旧港地区の間を分断する沿岸環状道路を半地下化して都市を地中海へ開くとともに、老朽化、環境悪化に悩まされていた沿岸工場地区をオリンピック村に再開発したのだ。バルセロナではその後も後述のような都市再開発が積極的に推進され、都市としての魅力を向上させていった。

欧州のビジネスマンに対するアンケート調査をもとにした「欧州都市モニター」の2010年版（Cushman & Wakefield 2010）によれば、バルセロナは「今日の欧州でビジネス立地に最適の都市」という総合評価でロンドン、パリ、フランクフルト、ブリュッセルに次いで5位にランクインしている。ちなみに首都マドリードは8位である。また「働く人にとって生活の質が最高の都市」の部門では、バルセロナは不動の1位を保っている。

<sup>2</sup> LRTはLight Rail Transitの略称であり、欧米で路面電車を再生または復活させた高性能の軌道系輸送システム。従来型の路面電車との大きな違いとしては、技術革新による走行性能の向上や、専用軌道と優先信号の設置による定時性・高速性の実現などが挙げられる。詳細については、大分経済同友会2011a、同2013を参照。

<sup>3</sup> 蒸気機関車を模した先頭車両の後部に客車を2、3両連結させ、主に観光客を乗せてまちなかの一般道をゆっくり走行する交通機関。スペインやフランスの諸都市を視察すると、大分駅のぶんぶん号のようなミニトレインが、市街地の路上を走る風景にしばしば出くわす。

年間の観光客数は約 750 万人で世界 20 位であり、観光以外にも多様な産業が集積し、自動車、製薬、化学、文化産業、グルメなど、バランスの取れた都市といえよう。観光客数はオリンピック以前に比較してほぼ 2 倍の水準となり、現在のバルセロナは観光客数の量的拡大ではなく、質のよい観光客の誘致に力を入れている。欧州では、国際会議や見本市にビジネスマンが妻を連れて一週間程度滞在することが多いが、夫が会議に出席している間に妻が一人で時間を過ごせることが、こうしたコンベンションを誘致する条件になる。バルセロナには約 60 のミュージアムが立地し、高級ショッピング・ゾーンやミシュランの星付きレストランがある。ホテルも、以前は大きな催しが重なると不足していたが、そのために 22@地区(後述)などで新たなホテルの開発が進んだ結果、バルセロナはロンドンやパリの仲間入りを果たしたといえる。

## (2) ラバル地区

バルセロナの都市再生において、乱開発された郊外地区や沿岸工場跡地以上に大きな課題であったのは、老朽建築が密集し、治安・衛生面でも劣悪な環境に置かれた旧市街である。旧市街の再生にあたっては、たしかに全体計画も必要ではあるが、まずは戦略的に成功体験をつくることが重視された。

まちなか再生の第一歩は、清掃からスタートする。ポテンシャルがあると思われる地区のゴミや違法広告を撤去する。次に、路上駐車が常態化した広場から車を追い出し、緑化やベンチの設置を行うことで、旧市街の公共空間が再発見される。さらに次の段階として、地区内にある空き家を壊して小さな辻広場を生み出す。そうした広場に近所の人々がオープンカフェなどを開くようになり、疲弊したまちなかに活気が戻りはじめる。

再生の対象となった旧市街の中でも、特に悲惨な状態にあったのがラバル地区である。ラバル地区は東側が目抜き通りであるランブラス通りに面し、その沿道には歴史あるリセウ劇場や、バルセロナ最大の市場であるサン・ジュセップ(ボケリア)市場も立地している。しかしながら、ひとたび地区内に入ると細い路地が錯綜し、移民・難民が流入し、社会的に排除された人々が暮らす地区となっていた。売春や掏摸、強盗など治安面で大きな課題を抱え、一般市民が足を踏み入れるのを躊躇う場所となって、人口もピーク時の半分以下となり多くの空き家が生じていた。このため、ラバル地区では、清掃活動や小規模なスポンジ化だけでは十分な成果があがらず、密集した老朽建築物群を撤去して大規模な二つの公共空間を設けることとした。

第一の公共空間は、ラバル地区に新たにバルセロナ現代美術館を建設する際、その前に同時に整備された広場である。美術館裏手の救護院跡もバルセロナ現代文化センターに生まれ変わり、疲弊した旧市街に文化人やアーティストが自然に入りこむようになっていった。広場の地下には、ラバル地区最初の地下駐車場が整備された。この広場は現在、欧州有数のスケートボーダーの聖地としても知られ、それを逆手にとって広場で欧州のチャンピオン選手権も開催しているそうだ。視察時にも、大勢の若者がスケートボードに興じている光景を見かけた。

第二の公共空間はランブラ・ラバル(ラバル遊歩道)である。ランブラとは、中央部分が歩道でその両側に車道が走る歩道中心の街路で、カタルーニャ州全般でよくみられる。ランブラ・ラバルは、ラバル地区でも特に建物が密集した 6 街区を取り壊し、そこに幅 55m×長さ 320mの広場通りを整備したもので、地下にはやはり駐車場が設けられた。ランブラ・ラバルには、彫刻家フェルナンド・ボテロの作品「ラバルの猫(El Gato de Raval)」が設置され、また、路上演劇などのイベントにも力を入れているという。

ラバル地区にはさらに、バルセロナ大学の都心キャンパスとして、歴史学科と哲学科が移転してきた。学生という、お金は少ないが時間は有り余っている人々が大勢集まり、学生の寄宿舍が地区内にできることで、ラバル地区の治安改善に望ましい効果をもたらしたという。



旧市街の治安・衛生面を回復させるため老朽建築を撤去して公共空間と公共施設を建設



バルセロナ現代美術館(MACBA)も老朽建築物を撤去して公共空間を作り出した、また古い救護院をバルセロナ現代文化センターにリノベーション



老朽建築を撤去した空間、MACBAに隣接したオープンカフェ





MACBA 前広場は現在、欧州有数のスケートボードの聖地



ランブラ・ラバル（ラバル遊歩道）道路の真ん中に幅 55m×長さ 320mの広場がある



ランブラ・ラバル、中央部分が歩道でその両側に車道が走る歩道中心の街路



彫刻家フェルナンド・ボテロの作品「ラバルの猫（El Gato de Raval）」



ランブラ・ラバルは地元住民が寛ぐ



オープンカフェも設置され、にぎわいとくつろぎを生む

### （3） 2 2 @

ポブレノウ地区はバルセロナ都心部の東側に位置するエリアで、19世紀には繊維産業で繁栄し「カタルーニャのマンチェスター」と呼ばれたが、第二次大戦後に環境汚染問題やスペース不足から工場は徐々に郊外に移転していき、荒廃の徴候が現れた。それが1986年にオリンピック招致が決まって以降、ポブレノウの中でも地中海に面するイカリア界隈がオリンピックの選手村に選ばれて再開発が進んだ。

1990年代にはポブレノウ地区の脱工業化がさらに進んだことから、地区の大半を占める約200haのエリアを情報通信産業、文化産業の拠点として再開発する22@プランが採択された。EUの都市計画では工業専用地域に「22a」というコード番号が当てられており、ポブレノウの沿岸工場地区もこのコード22aに該当していた。IT関連産業をはじめとする知識集約型産業にふさわしい都市環境を目指す意味で、この地区には「a」を「@」に代えた「22@」という名称が与えられたのだ。ラス・グロリアス・カタラナス広場（グロリアス広場）の東側から沿岸部にかけて広がる22@のエリア内では、職住近接の都市再開発を目指して、用途の複合・混在を認めつつ、情報通信産業の誘致や公共住宅の整備に際しては容積率を緩和するなどの措置を講じるとともに、インフラの不足・劣化に対応した大規模投資も行われた。22@の中核的プロジェクトとしては、メディアに関する企業・大学を集積させたオーディオ・ビジュアル・シティ（延床面積17.5万㎡）などが知られている。

ラバル地区と異なりハコモノ開発のイメージが強い22@だが、まがりなりにも都市インフラの残っていたラバルと異なり、ポブレノウはスラムと化しており、ガスも電気も通っていない小屋が多く建ち並んでいたという。すなわち、都市計画的には更地に近い状態であり、インフラ整備の段階から面的開発を行う必要があったようだ。

22@プラン採択から2010年にかけて、ポブレノウ地区の約65%で再開発が終了し、約283haの土地整備と1,500超の事業者の入居が進み、合計4.5万人の雇用を生み出したとされる（阿部2012）。一方で、リーマン・ショック以降の金融危機の中でオフィス開発が止まった計画もあり、また、業務系以上に住宅系の開発への影響が大きいという話を現地で聞いた。

### （4） グロリアス広場周辺の都市再生

22@に近いグロリアス広場は、バルセロナの基盤目状の街区を斜めに突っ切るディアゴナル通りとメリディアナ通りという二本の大通り、そして基盤目に沿った街路グラム・ビア・レズ・コルツ・カタラネスが交わる結節

点であり、セルダの都市計画全体の要となる。まさにバルセロナの原点<sup>4</sup>ともいえる場所だが、この広場の周囲でもさまざまな再開発プロジェクトが展開している。22@の西端に位置する場所だが、Ajuntament de Barcelona 2011 掲載の区域図を参照するに、広場周辺は22@の事業エリアから微妙に外れているようだ。

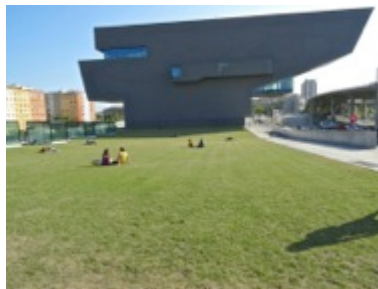
グロリアス広場には、バルセロナの新しいシンボルともいえる高層建築アグバル・タワーが聳える。フランス人建築家ジャン・ヌーヴェルの設計した紡錘状のタワーであり、2004年に完成した。アグバル社はバルセロナの水道事業を担う民間企業で、バルセロナばかりでなくスペイン各地でも水ビジネスを手がけるが、現在はフランス系のスエズの傘下にある。

タワーの近くには、バルセロナ・デザイン・ハブ (Disseny Hub Barcelona=DHUB) も整備され、2013年6月末の開館に向けて最終準備中とのことであった。バルセロナの都市計画を主導した建築家ボイガスの設計ながら、必ずしも市民の評判はよろしくなく、その形状から「ホッチキス」と揶揄されていると聞いた。DHUBには、アート・デザイン振興会 (Foment de les Arts i del Disseny=FAD)、バルセロナ・デザイン・センター (Barcelona Centre del Disseny=BCD)、バルセロナ・デザイン・ミュージアム (Museu del Disseny de Barcelona) などデザイン関係の機関が入居している。

さらに、DHUBの近くに銀色に輝く大屋根が見えた。いったい何の建築だろうと思ったが、蚤の市のマーケット会場とのことである。もともとグロリアス広場周辺で催されていた有名な蚤の市「エンカンツ」をこの場所に移転させるプロジェクトで、当初は2013年6月オープン予定であったが、遅延して9月にオープンした模様。



バルセロナの新しいシンボルともいえる高層建築アグバル・タワー



バルセロナ・デザイン・ハブ (Disseny Hub Barcelona=DHUB)



新しく移転する蚤の市マーケット会場「エンカンツ」建設費はネイマール移籍金と同額

## (5) バルセロナの交通まちづくり

バルセロナの公共空間整備の基本コンセプトは、温暖な気候を踏まえた心地よい屋外空間づくりであった。交通戦略の面でもバルセロナは、道路から自動車を減らして歩行者や自転車にやさしいまちづくりを行っている。

バルセロナの公共交通機関としては、スペイン国鉄 (Red Nacional de los Ferrocarriles Españoles=RENFE) の近郊線、カタルーニャ公営鉄道 (Ferrocarrils de la Generalitat de Catalunya=FGC) の運営する鉄道、バルセロナ交通局 (Transports Metropolitans de Barcelona=TMB) の地下鉄・バスなどがある。TMBの運営するバルセロナ地下鉄は8路線あり、FGCでも都心部を走る路線については地下鉄化されている模様である。バリアフリー化は、バスでは100%実現しており、地下鉄でもかなり進展している。

バルセロナはまた、2004年にスペインで最初にLRTを導入した都市<sup>5</sup>でもあり、現在では6系統が運行している。市街地西部のフランセスク・マシア発のT1~3の3系統は西に向かって延び、シウタデリャ/ピラ・オリムピカ発のT4、グロリアス発のT5~6の計3系統は、市街地東部の始発駅から東に向かって延びている。過去に視察したフライブルク、ナント、ストラスブール (大分経済同友会 2011a、2013) などの諸都市ではLRTは中心市街地を走行していたが、大都市バルセロナでは、LRT以外に地下鉄網も稠密に張り巡らされているため、中心市街地へのアプローチは主に地下鉄に任せ、LRTは市街外延部の停留場から郊外へ至るルートに導入されたようだ。なお、地下鉄・バス・LRTのチケットは共通で、初乗り料金が1.5時間乗り放題のため、多くの人々が公共交通を利用するようになったという。10枚綴りの回数券は、単独でチケットを買った場合の半額で購入できるそうだ。

<sup>4</sup> ただし、セルダ後のバルセロナの歴史的展開の中で、にぎわい面での実質的な原点となったのは、グラシア通りとランブラス通りが接するカタルーニャ広場である。

<sup>5</sup> スペインで二番目にLRTを導入したのが前回視察で訪れたビルバオである。大分経済同友会 2013 参照。



自転車交通については、ビシング (Bicing) というレンタサイクルのシステムが 2007 年より導入されている。パリのヴェリブ (Vélib) やナントのビクルー (Bicloo) と類似した仕組みである。ビシングの場合、利用者は年会費 35 ユーロを支払って、専用 ID カードの交付を受ける必要がある。このため、パリなどと異なり観光客は利用できない。代わって、観光客向けの自転車レンタル業が新興産業として成長しており、自転車を使ったツアーが人気となっているようだ。

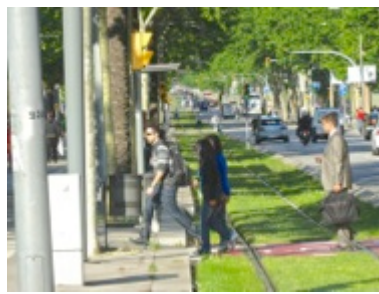
ビシングの使用には、年会費に加えて利用時間あたりの料金が 30 分毎に 0.5 ユーロ (最大 2 時間まで連続利用可能) がかかるが、最初の 30 分は免除されているため、多くの会員は無料でビシングを乗り回している。市内には約 1,500 の駐輪スポットが整備され、利用者は好きなどころで乗り降りできる。ただ、バルセロナの市街地は海に向かって緩やかな下り坂となっているため、街を上から下へ走る利用者が多く、坂の上では自転車が品薄になる一方で坂の下では駐輪スポットが満車になることが多い。このため、満車になったスポットから空いたスポットへ自転車を運ぶ専用車も運行している。自転車専用道の整備も進めているものの、レンタサイクル利用者がたいへん多いため、彼らが車道や歩道を走行する際に周囲に迷惑をかけず共存することが課題となっている。

なお、ビシングの事業費は主に、米国の大手屋外広告会社クリア・チャンネル・アウトドアから提供された資金で賄われている。資金提供の見返りとして、同社は、自転車本体や駐輪場に設けられるシェルターなどの広告販売権を一定期間独占できる仕組みである。

アバンカー (Avancar) というカーシェアリングのシステムも 2005 年から導入され、人気となっている。バルセロナでは、このシステムの国際標準化を構想しており、ID カードをドイツや米国の都市でも利用可能にしてインターネットで予約・利用ができるようにしている。



バルセロナは 2004 年にスペインで最初に LRT を導入した



LRT 軌道敷は緑化されている



ディアゴナル通りは真ん中は広い歩道と自転車道、両端に LRT、外側が自動車道



ビシング (Bicing) というレンタサイクルのシステムが 2007 年より導入



利用者は年会費 35 ユーロを支払って、専用 ID カードの交付を受ける



市内には約 1,500 の駐輪スポットが整備され、利用者は好きなどころで乗り降りできる

## (6) ランプラス通り

歩行者優先の道路づくりの事例として、ランプラス通りを紹介したい。交通まちづくりについて、識者に意見を伺う中で「3 km 程度の距離を思わず歩いてしまう都市は、よい都市だ」との指摘をいただいたことがある。バルセロナの場合、海岸からランプラス通り、グラシア通りを経てディアゴナル通りに至るまでが、おおむねその程度の距離である。すでに述べたように、バルセロナ市内には地下鉄もあるのだが、バルセロナの街であれば歩いてみようという気持ちになる。特にランプラス通りは 24 時間人通りが絶えることなく、「会いたいけれど会えない人がいるなら、ランプラスに行けばいい」と言い慣らわされてきた。視察団が訪れたときも、ランプラス通りは人々でいっぱいであった。もっとも現在では、人通りの 8 割は観光客となり、市民はどちらかという横道の方を歩くようである。

ランブラスはランブラの複数形であり、ランブラス通りは5つのランブラがつながったものである。ラバル地区の項目で説明したように、ランブラは歩車逆転した道路であり、カタルーニャ州では中小都市を含めてこうした形状の道路は多い。しかし、このランブラ形式を徹底できた街路は少なく、ランブラと直交する道路を自動車が横断するため歩道が随所で分断された通りが多い。大分の遊歩公園通りを大規模にした街路をイメージしてもらえばよいだろう。たとえば、グラシア通りの一本西側を走るランブラ・カタルーニャを実際に歩いてみた。中央部の歩道を広く確保し屋台も常設したランブラだが、いざ散策しようとする、いたるところで直交する車道にぶつかる。遊歩公園とは違って、歩道から車道を直接渡れるように信号と横断歩道が設けられているが、歩行者空間が寸断されている印象はどうしても否めない。

これに対してランブラス通りは、昔こそランブラ・カタルーニャと同様であったものの、現在では総延長 1.2 kmの通りが連続して歩道になっている。両側の車道にはバス・タクシーしか走ることが許されておらず、歩行者優先が徹底されている。旧市街は現在、基本的に全体が車両進入禁止となっていて、居住者や商業者だけが車で出入りすることができる。カードで認証すると、旧市街への出入りを塞ぐ車止めが下りるライジングボラードが導入されているようだ。

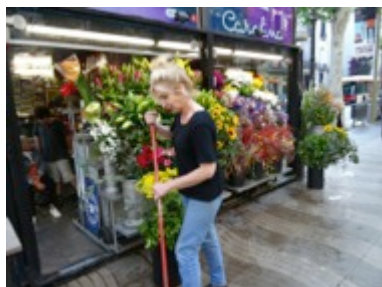
ランブラス通りの真ん中にある広大な歩道には、カフェテラスや花屋、土産物屋の屋台が多数出店し、客でにぎわっていた。こうしたカフェテラスは沿道にある店舗が経営しているが、沿道の店内とランブラスの屋台とでは、同じ飲料でも価格が異なるという。ランブラスで飲食するのは主に観光客で、ビール1杯が約1,000円という価格帯は、欧州一高いといわれる。一方、地元の人々が使う店舗のカウンターでは1杯200円程度で飲める。店と屋台で値段が違うのは、ランブラス通りの歩道空間で商売を行うにはバルセロナ市へ使用料を支払う必要があるからである。看板を出す場合も同様に使用料を払う必要がある。すべてを賄っているか否かは別として、こうした収入で公共空間をメンテナンスする費用を捻出することが、まちづくりの理念となっている。公共空間で飲食する人々からお金をとって、その収入を公共空間のグレードアップに回すのだ。バルセロナではまた、駐車場代や駐車違反の罰金も収入源となっており、市警は駐車違反を摘発してせっせと罰金収入を稼いでいるそうだ。



ランブラス通りは多くの人でにぎわう。道路の中央部が歩道になっており 1.2 km分断されない「会いたいけれど会えない人がいるなら、ランブラスに行けばいい」と言い慣らわされてきた



歩道の両側が車道になっており、居住者と商業者以外、バス・タクシーのみ通行可



ランブラス通りで一番人気のある花屋



ディキシーランドジャズの大道芸人



ランブラス通り沿いには人気のサン・ジョセップ市場もあり、にぎわいに相乗効果

## (7) カンプ・ノウ

カンプ・ノウは、バルセロナの地元サッカーチーム、FCバルセロナ（バルサ）のホームスタジアムである。フランコ政権下でバルセロナではカタルーニャ語の使用が禁じられたが、カンプ・ノウでは唯一「フォルサ・バルサ（バルサ頑張れ）」「ヴィスカ・バルサ（バルサ万歳）」とカタルーニャ語で祖国への想いを叫ぶことができたという。こうした歴史的経緯から、バルサは地元カタルーニャの象徴として「クラブ以上の存在」と呼ばれる。

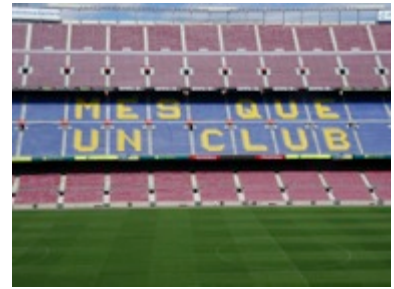
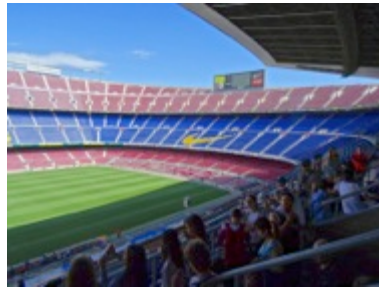


カンブ・ノウは、バルセロナの中心部からディアゴナル通りを 2〜3 kmほど西進した新市街に位置する。周辺は大学地区で、ガウディが改装を担当したグエル別邸も近くにある。カンブ・ノウとは「新競技場」の意味。スタジアムの完成は 1957 年で、長い歴史を重ねてはいるのだが、以前ラス・コルツにあった旧競技場との対比で今もカンブ・ノウと呼ばれている。

カンブ・ノウ内部にはミュージアムが設けられており、トロフィーなどを展示したケースや、歴代の名選手のプレイを見ることのできるマルチメディアゾーンなどが配置されている。スタジアムで試合が行われていないときは、このミュージアムに加えて、ピッチ、観覧席、選手控室、プレスルームなどを見学できるスタジアムツアー「カンブ・ノウ・エクスペリエンス」に参加することができる。ミュージアムの来場者数は、カタルーニャでは、フィゲラスにあるダリ劇場美術館に次いで多いという。



カンブ・ノウ・スタジアム、フランコ政権下カタルーニャ語を禁止されていた時代も市民はカンブ・ノウ（カタルーニャ語で新競技場の意味）と呼びカタルーニャ語で応援を続け祖国愛を保った



バルサのモットー「クラブ以上の存在」とカタルーニャ語で書かれている



スタジアムは試合日以外に見学ができ、年間 132 万人も訪れ集客数はダリ劇場美術館に次ぐ 10 万人収容スタジアムの毎試合観客数を算入するとバルセロナ一番の集客力かもしれない



過去のバルサの名プレーをオンデマンドで視聴できる



メッシが受賞した年間で世界一のサッカープレイヤーに贈られるパルムドールのカップ



館内には広いバルサのショップがある



移籍が決まったばかりで背番号も決まっていないネイマールのレプリカユニフォームも販売



観客の声援のなか選手入場する体験もできる



通路の先には素晴らしいピッチが・・・感動



ミロが 1974 年に作成したバルサのポスター 芸術家にも熱烈なファンがいる

## 2. マドリード

マドリードは、イベリア半島のほぼ中心に位置するスペインの首都で、人口は約 320 万人。マドリード視察の主目的は、この都市に集積する美術館の見学であるが、ここでは都市のにぎわいづくりの視点から興味深い地区、プロジェクトを幾つか概観したい。

### (1) チュエカ地区

チュエカ地区はマドリードの中心部に位置し、美術館の集積するエリアからも近距離にある。かつては麻薬の流通などで治安が悪化し、一般市民には立ち寄りやすい地区であったが、フランコ政権下で弾圧されていたゲイが、1990 年代に安い家賃を求めてこの地区に集まるようになった。流行に敏感な彼らは、センスのよい店舗を地区内で続々オープンさせた結果、チュエカ地区はスペインの流行の発信基地として甦ったという。

都市経済学者の R・フロリダが、都市の経済成長には技術 (technology)、才能 (talent) に加えて寛容性 (tolerance) が必要と唱え、寛容性を計測する指標としてゲイ・インデックス (地域の同性愛人口比率) を開発したことは、創造的階層 (Creative Class) の議論ではよく知られている。そうした意味では、チュエカ地区は恰好の見本といえるかもしれない。



マドリードの中心プエルタ・デル・ソル広場



広場につながるモンテラ通りは歩行者専用でオープンカフェもある



チュエカ地区フェンカラル通りも歩行者専用でにぎわう



チュエカ地区、かつては麻薬の流通などで治安が悪化し、一般市民には立ち寄りやすい地区であったが、フランコ政権下で弾圧されていたゲイが、1990 年代に安い家賃を求めてこの地区に集まるようになった。流行に敏感な彼らは、センスのよい店舗を地区内で続々オープンさせた結果、チュエカ地区はスペインの流行の発信基地として甦った

### (2) アトーチャ駅舎

アトーチャ駅は、マドリード最大の鉄道駅であり、スペイン国鉄の RENFE が運営している。マドリード都市圏を結ぶ近郊線を中心とするアトーチャ・セルカニャス駅、長距離路線である高速鉄道 (Alta Velocidad Española = AVE) の起点であるプエルタ・デ・アトーチャ駅という隣接する 2 つの駅から構成される。

アトーチャの旧駅舎は、19~20 世紀初頭の大都市のターミナル駅建築の典型例であり、非常にシンボリックな建物であったが、1992 年の AVE 開通ともない、駅機能は隣接する新駅舎に移転した。このため、旧駅舎の取り壊しが検討されたが、最終的には旧駅舎外観を保存しつつ、内部を乗客サービス、商業施設、待合室、カフェテラスなどとして利用することとなった。特に待合室、カフェテラスとして利用される旧駅舎のプラトホーム部分は、鉄とガラスを用いた天井の高い空間を「植物園」に見立てた演出がなされた。歴史ある建築に新しい役割、意匠を施した事例として興味深い施設であった。





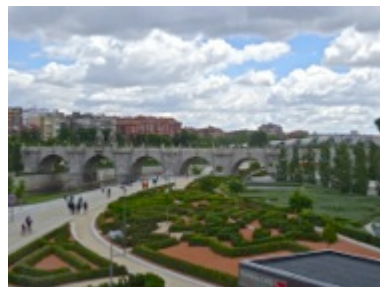
アトージャ駅の旧駅舎は、19～20世紀初頭の大都市のターミナル駅建築の典型例であり、非常にシンボリックな建物であったが、1992年のAVE開通にともない、駅機能は隣接する新駅舎に移転した。旧駅舎の取り壊しが検討されたが、最終的には旧駅舎外観を保存しつつ天井の高い空間を「植物園」に見立てた演出がなされた。歴史ある建築に新しい役割、意匠を施した事例として興味深い施設であった。

### (3) マドリード・リオ

マドリードには環状道路が3本走っており、内側から30号線、40号線、50号線と名づけられている。このうち、30号線（延長約35km）は、マドリード市街地を貫流する唯一の河川であるマンサナレス川に沿って走っており、このためマンサナレス河畔エリアは従来、景観・環境面に問題があった。

マドリード・リオは、30号線のマンサナレス河畔を走行する部分を地下化して、河畔一帯を親水・景観・自然環境に配慮した公園空間として整備し、市中心部に広大な公共空間を創出するプロジェクトである。30号線は、都市再開発計画により2003～07年にかけて地下25mに埋設され、その後、2007～11年にかけて跡地に全長10kmに及ぶ大規模な緑地帯が設けられた。

エリア内には散歩コース、サイクリングコースに加えて、さまざまなスポーツ施設（サッカーコート、テニスコートなど）や子ども向けの遊戯スペース（滑り台、ブランコなど）が設けられている。視察時にも、多くの市民がジョギング、サイクリングに興じたり、その場で弁当を広げたりする風景を見ることができた。



マドリード・リオは、30号線のマンサナレス河畔を走行する部分を地下化して、河畔一帯を親水・景観・自然環境に配慮した公園空間として整備した





### 3. モナコ（コート・ダジュール地方①）

これまでの視察や地域委員会での議論を踏まえるに、創造都市の実現にはアート単独ではなく、観光振興や食文化など多面的な魅力を融合させた総合的な魅力の醸成・発信が不可欠と考えられる。

大分県では先般「おんせん県」を標語にツーリズム戦略を初めて策定し、観光振興に一層の注力を図っているところであり、今後の観光のあり方に係る思索を深める必要がある。大分県の観光地としては、別府と湯布院が双璧だが、早くから団体旅行対応、大衆化路線を図った別府に対して、個人客を中心に高級イメージでブランド化した湯布院の方が、現時点では人気を高めているといえよう。

大分の観光振興を考えるうえで、ハイエンドな観光地のあり方についても学ぶべきと考えたため、世界的に高い付加価値を有する観光地コート・ダジュール地方の視察を行うこととした。視察を行った都市は、モナコ（近郊エリアを含む）、カンヌ、ニースである。

#### （1）モナコ

わが国で統合型リゾート（Integrated Resort＝IR）への関心が高まっている。IRとは、宿泊・飲食施設に加えて、カジノを含むエンターテインメント機能を擁する観光施設のことである。2013年12月には、超党派の国際観光産業振興議員連盟により、カジノの解禁を含む、特定複合観光施設区域の整備の推進に関する法律案が国会に提出されたところである。

日本におけるIRのあり方を考えるうえで、今回の視察では、カジノの代名詞ともいべきモナコ公国を訪れた。モナコは、わずか2km<sup>2</sup>の国土に3.6万人が居住する都市国家である。大分市の中心市街地エリア（大分市中心市街地活性化基本計画に定める区域）の面積が1.5km<sup>2</sup>であるのと比較すると、大まかなスケール感を掴むことができよう。

モナコは、19世紀中頃まで岩山の他に何も無い土地であったが、その後百年ほどの間にカジノを導入して観光立国を果たした。モナコのカジノでもっとも有名なのは、モンテカルロ地区に立地するカジノ・ド・モンテカルロである。1863年創業の老舗カジノで、現在の建物はパリのオペラ座で知られるシャルル・ガルニエの設計（1878年完成）。このカジノにはオペラハウスが併設され、隣接して国際会議場や、オテル・ド・パリ、オテル・エルミタージュといった高級ホテルが建ち並ぶなど、モンテカルロ地区はモナコ観光の中核をなしている。

ただし、モナコでカジノに入ることができるのは外国人だけであり、自国民がカジノでギャンブルを行うことは法律で禁止されている。わが国でカジノ解禁の是非を議論する際、国民がギャンブル依存に陥るリスクがしばしば指摘されるが、モナコではカジノを外貨獲得の手段と割り切って、自国民のギャンブル依存を防止しているようだ。このため、カジノの入口は空港の出入国管制さながらで、入場する観光客にはパスポートの提示が義務づけられ、受付ではパスポートのデータを電子的に読み取って記録している。

ちなみに、19世紀にはモナコの国家収入の9割はカジノに依存したそうだが、今日ではごく低い割合にとどまる。現在のモナコは所得税がかからないタックス・ヘイヴンとなっており、このため、モナコ国外から収入を得る富裕層が数多く住みつくようになったのだ。3.6万人の住民のうちモナコ国民はわずか6千人程度に過ぎず、残りは外国人である。そして、モナコには所得税はないが付加価値税は導入されているため、現在では、富裕な外国人が支払う多額の付加価値税が国家の財政基盤をなしている。

また、カジノ導入に際しては治安の悪化が懸念されることも多いが、モナコは夜間に女性が一人歩きしても安全だといわれる。ただし、こうした治安を保つために、警官が住民70名に対して1名というきわめて高い割合で配置されている。実際、モナコのまちなかを歩くと頻繁に警察官と行き交う。彼らは仏・英・西・伊の4ヶ国語に精通し、富裕層や観光客から寄せられるさまざまな相談・要請に対応しているという。また、狭い国土に500台以上の監視カメラが設置され、警察官が常時監視にあたる。国内で何らかの事件が発生すれば、数分間で国境を封鎖することができるという。日本並みともいえるモナコの治安は、セキュリティ維持のための多額の人的投資やインフラ投資に支えられているようだ。

さて、ここまでカジノを中心に説明してきたが、観光客は何もカジノの魅力だけでモナコを訪れるわけではない。高級ホテルやミシュランの星を戴くレストランは、モナコ観光の重要なコンテンツとなっているし、F1モナコグランプリなど、モータースポーツの世界選手権大会の会場としても人気である。



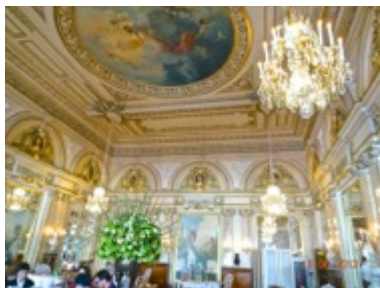
モナコは、わずか2 km<sup>2</sup>の国土に3.6万人が居住する都市国家で統合型リゾート(IR)の手本



モンテカルロ地区に立地するカジノ・ド・モンテカルロ 1863年創業の老舗カジノで、現在の建物はパリのオペラ座で知られるシャルル・ガルニエの設計(1878年完成)



カジノに隣接するホテル・ド・パリ 高級スポーツカーが並ぶ



ホテル・ド・パリ内にはフランス料理の天才シェフであるアラン・デュカスが手がけるミシュラン三つ星レストラン、ルイ・キャーンズもある



アニッシュ・カプーアの手になるパブリックアート「スカイ・ミラー (Sky Mirror)」



毎年大型イベントF1グランプリが開催される有名なヘアピンカーブ



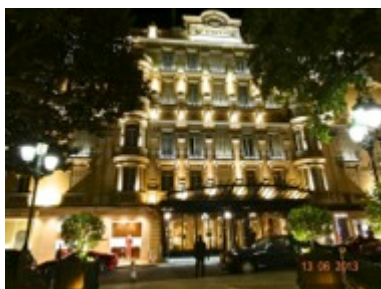
狭い国土に500台以上の監視カメラが設置され常時監視を行い治安の良さは日本並み



旧市街の街あるきも楽しめる



メトロポールホテルにはアラン・デュカスのライバルであるジュール・ロブションの二つ星レストランがある 狭いエリアで有名レストランが多数営業している



ホテル・ド・パリと対をなすエレガントなホテル・エルミタージュ エッフェル塔を設計したギュスターヴ・エッフェルの設計になる荘厳なガラスドーム「冬の庭」は鉄骨とガラスで建てられている



大分の観光にとって付加価値のある観光地、コート・ダジュールの海岸都市は参考になる



さらに今回の視察で、モナコは現代アートにも力を入れていることを発見した。モナコの新国立美術館 (Nouveau Musée National de Monaco=NMM) は、歴史的建築を転用したパロマ館 (Villa Paloma)、ソベール館 (Villa Sauber) の二館体制だが、いずれの館も現代アートに力を入れている。パロマ館は、モナコ高台のモネグッティ地区に位置し、美しいイタリア式庭園に囲まれた館内では、現代アートが展示されている。一方、ソベール館は中心部のモンテカルロ地区に立地しており、カジノ・ド・モンテカルロと同じくガルニエの設計になる。ソベール館には公国の歴史的コレクションも収蔵されるが、やはり、現代アートを中心にユニークな企画展示を行うことで知られている。

視察当時、NMMでは「モナコポリス：モナコの建築、都市計画、都市化 1858年～2012年の建設とプロジェクト (MONACOPOLIS Architecture, Urbanisme et Urbanisation à Monaco, réalisations et projets – 1858-2012)」という展覧会を開催中であった。NMMが、モナコの建築・都市計画について2年を費やして研究・整理した成果を展示した特別展で二つの美術館を会場としている。ソベール館では、600点を超える地図や模型を用いてモンテカルロ地区の変遷と都市化の経緯を展示し、パロマ館では、実現をみなかった建設プロジェクトや都市化に関する問題解決のための提案を紹介する。モナコの観光立国の歴史を窺ううえでも参考になりそうな展覧会であったが、残念ながら視察当日が臨時休館日となっており、見学はできなかった。

ただし、モナコにおける現代アートへの注力に関しては、美術館に入るまでもなく、まちなかを散策するだけで、ある程度は察することができる。都市のいたるところに、現代アートの彫刻が飾られているのだ。特に印象的だったのは、インド出身の世界的アーティスト、アニッシュ・カプーアの手になるパブリックアート。カジノ広場は、カジノ・ド・モンテカルロやオテル・ド・パリに取り囲まれた、モナコのシンボルともいえる広場だが、その中央部に、カプーアの代表作「スカイ・ミラー (Sky Mirror)」が据えられているのだ。この作品は巨大な凹面鏡であり、タイトルのおおりに大空を美しく映しこむことで知られる。見る角度次第で、カジノ・ド・モンテカルロが天地逆転して映りこむ姿を眺めることもできる。

交通まちづくりの観点から、モナコのレンタサイクルについても触れておこう。岩山を拓いて築かれた都市国家モナコには急峻な坂が多く、自転車を利用しやすいエリアは限られるため、レンタサイクル・システムの導入は難しいと予想していたのだが、この街で見かけたレンタサイクルは何と電動アシスト自転車であった。通常の自転車に比べて高価な電動アシスト自転車は、普通の欧州都市なら盗難が懸念されるだろう。治安のよいモナコならではの取り組みであると感じた。

以上、モナコの観光コンテンツを並べてきたが、モナコ観光の魅力はモナコ一国で完結するものではない。モナコ公国から至近距離にフランス国内の観光地があることで、両者の間に相乗効果が発揮されている模様だ。今回の視察では、エズとマントンを訪れた。

## (2) エズ

コート・ダジュール地方には、急斜面の岩山に民家が密集する村落が数多く存在し、切り立った崖に鷲が巣をかける様子に喩えて「鷲の巣村」と呼ばれる。このような場所に村を構えたのは元来、外敵の侵入を阻むためであり、村は城壁に囲まれ、村内の街路も迷路のように入り組んでいる。コート・ダジュールの海岸線をモナコから西に車で15分ほど走った場所にあるエズ村は、こうした鷲の巣村の代表格である。

海拔427メートルの岩山に聳えるエズでは、中世の面影を残す街並みが綺麗に保存されており、頂上から見おろす地中海の風景は実にすばらしい。曲がりくねる小路には歴史を感じさせる建物が並んでおり、その多くは工芸作家・画家のアトリエや、レストラン、土産物屋などとして活用されている。どのような客層を相手にしているのかは分からないが、現代アートのギャラリーまで立地していた。

エズには、一般の観光客も数多く訪れるが、モナコ近隣の観光地ということもあって富裕層への対応も怠りない。たとえば、エズを代表する高級ホテルのラ・シェーヴル・ドール (La Chèvre d'Or) の宿泊料金をウェブで確認したところ、300～2,600ユーロという価格帯であった。

## (3) マントン

今度はモナコから東に向かって車で20分ほどフランス国内を走ると、イタリアとの国境近くにマントンの街が見えてくる(人口3万人)。もともとレモンと漁業が主産業の街だが、19世紀末から観光地として知られるようになり、ホテルや別荘が建ち並んだ。モナコに比較すれば中流層の観光客がフランスやイタリアから訪れる海浜リゾートであり、視察団が訪れたのが6月中旬であったにもかかわらず、多くの観光客が浜辺に出ていた。



マントンには、詩人のジャン・コクトーが頻繁に訪れ、旧港にある 17 世紀の小要塞を利用した要塞美術館にはコクトーの作品が展示され、マントン市庁舎の「結婚の間」には、コクトーが装飾を手がけた壁画がある。そうしたコクトー関連の観光資源に近年、新たに加わった顔ぶれが、2011 年開館のジャン・コクトー美術館であるが、この美術館については第 5 章で扱う。



エズはモナコに隣接する観光地 外敵の侵入を阻むため急斜面の岩山に民家が密集する村落が数多く存在し、切り立った崖に鷲が巣をかける様子に喩えて「鷲の巣村」と呼ばれる 頂上から見おろす地中海の風景は実に素晴らしい



モナコから東に向かって車で 20 分ほどフランス国内を走ると、イタリアとの国境近くにあるマンントンの街に着く モナコに比較すれば中流層の観光客がフランスやイタリアから訪れる海浜リゾート地 2011 年にジャン・コクトー美術館が開館した



## 4. カヌ（コート・ダジュール地方②）

カヌは、プロヴァンス・アルプ・コート・ダジュール地域圏、アルプ・マリタイム県に属する都市で、人口は7万人。元来は農漁業を中心とする村であったのが、19世紀中頃より高級リゾート地として発展した。この街のキラークンテンツは、世界的に有名なカヌ国際映画祭だが、その他にもカヌライオンズ国際クリエイティビティ・フェスティバル（広告映像の映画祭）など、さまざまなイベント・見本市がこの地で催される。

海沿いに走るクロワゼット大通りはカヌの目抜き通りであり、沿道にはインターコンチネンタル・カールトンをはじめとする高級ホテルや、ブランドショップが建ち並ぶ。映画祭の会場となるパレ・デ・フェスティバル・エ・デ・コングレも、この大通りに面している。夜間には、大通りの歩道脇に仕込まれたライトが色調を変えつつ発光し、夜の街に彩りを添える。

視察時のカヌは、5月の国際映画祭を終えた後で、かつまた6月下旬の国際クリエイティビティ・フェスティバルがスタートする直前であったことから、比較的閑静な佇まいをしていた。カヌの滞在時間は短かったため、まちなかの見どころを効率的に見て回るうえで、ミニトレインの利用を決める。過去の視察ではLRTに幾度か試乗したが、ミニトレインは残念ながら乗車する機会がなかったため、この機に都市の観光装置としてのミニトレインを実体験しようとの意味合いもあった。

ミニトレインは海岸沿いの駐車場を出発した後、クロワゼット大通りに沿って東方向へ走る。その後、北に曲がって商店の建ち並ぶアンティープ通りに出ると、今度はその通りを西に向かって走行。その後、旧市街へと入ったミニトレインは、カヌ全景を見渡すことができるシュヴァリエ山の山頂まで登りつめ、そこで観光客にカヌの眺望を楽しむ時間を与えるために、しばらく停車した。小山とはいえ急峻な坂道を、客車3両を引いたミニトレインが楽々登坂していく姿は意外であった。



カヌは19世紀中頃より高級リゾート地として発展した



カヌ国際映画祭が開かれるパレ・デ・フェスティバル・エ・デ・コングレ レッドカーペットで有名な階段



観光用ミニトレイン



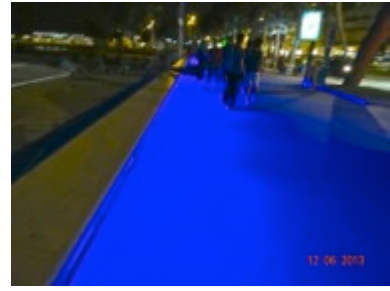
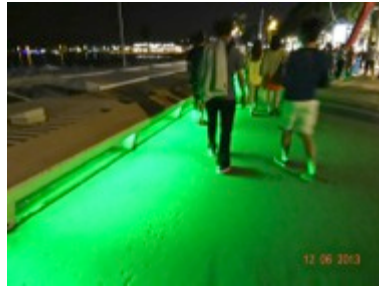
カヌを代表する高級ホテル、インターコンチネンタル・カールトン



海岸にはホテルのプライベートビーチが並ぶ



多くの高級店が店を構えるクロワゼット大通りはカヌの目抜き通り



クロワゼット大通り海側の歩道脇に仕込まれたライトが色調を変えつつ発光し、夜の街に彩りを添える



地元の商店がならぶアンティープ通り

高級リゾートエリアと旧市街が隣接しており旧市街が街の奥行きをつくる（写真は早朝）

旧市街には気軽なオープンテラスのシーフードレストランなども多い

## 5. ニース（コート・ダジュール地方③）

ニースは、地中海に面する世界的に有名な保養地・観光都市であり、人口は35万人。プロヴァンス・アルプ・コート・ダジュール地域圏に属し、アルプ・マリタイム県の県庁所在地である。すでに述べたように今回の視察は創造都市、美術館の視察が中心であるが、ニースのまちづくりは特に交通面でたいへん興味深いため、現地で視察した交通まちづくりの状況を中心に説明を行う。

ニースでは1953年に路面電車が廃止されたが、2007年に全長8.7kmのLRT1号線が新たに開業した。都市景観を重視して、ボルドーと同じく一部区間で路上に架線と架線柱が露出しない架線レスのシステムが採用されている。ただし、地中に埋めた架線から電力を供給するボルドーのAPS方式と異なり、ニースでは架線レス区間は蓄電池を用いて走行する。ニースの場合、架線がカーニバルの邪魔になるため、カーニバル会場となるマセナ広場、ガリバルディ広場をまたぐ区間のみを架線レスとすることとし、APSよりも安価な方式を導入してコストを節減した模様だ。現在はLRTの2号線11.3kmの整備も着工した模様である。この路線は、ニースの中心市街地と空港を結ぶ路線で、中心市街地の3.2kmは地下を走行する計画である。

ニースではまた、LRT整備とあわせて沿道の公共空間のデザインを刷新を進めた。残念ながら詳しく視察する余裕がなかったのだが、ニースではLRT沿線の地区・停留場に現代アートの設置を行ったという。2011年の視察で訪れたフランスの地方中小都市ミュールーズ（大分経済同友会2011a）の場合、すべての停留場のデザインをフランスの代表的アーティスト、ダニエル・ビュランに一任したが、ニースでは、国際コンペを実施して15名のアーティストを選出し、彼らの作品をLRT沿線に配置した。彼らアーティストの中には、別府の「混浴温泉世界2009」に参加したサルキスや、瀬戸内の男木島の港湾待合所「男木島の魂」をデザインしたジャウメ・ブレレンサの名も含まれている。

この他にニースでは、大規模な歩行者空間の整備が進行中であった。ニースの中心市街地には、海沿いのアルベール1世公園からマセナ広場を経て、ガリバルディ広場に隣接するニース近代・現代美術館周辺まで、総延長1.2km、面積12haに及ぶ広大な帯状の空間が設けられている。並行するジャン・ジョレス通り（LRTが走行）、フェリックス・フォール通りに挟まれたこの空間は、ニース市街地を流れるパイヨン川を暗渠化して生み出した土地であるが、以前は遠距離バスターミナルや駐車場として用いられていたという。ニースではこれらの機能を周辺に移転させ、この地区全体を歩行者専用の公園エリアとするとのことで、視察時は地区全体を仮設の防護壁



で覆って工事を行っていた。この公園は2013年10月に「パイヨン・プロムナード (Promenade du Paillon)」としてオープンした模様である。このように、公共交通重視・歩行者重視へと大胆に舵を切ったのが、今日のニースの姿である。

最後に、カンヌに続いてニースでもミニトレインに試乗したので、簡単に報告しておこう。ニースのミニトレインは、海沿いの街路であるプロムナード・デザングレ (イギリス人の遊歩道) を出発し、旧市街の入り組んだ路地を経由して城跡のある丘の上まで登っていく。そこから見おろすニースの風景は、北側には旧市街の赤茶の屋根が連なり、南側にはコート・ダジュールの紺碧の海が広がるというすばらしい眺望であった。思うに、ミニトレインの長所は、一般車道のみならずバスや自動車の通りにくい旧市街や丘陵の狭い道路も自在に走行し、街を象徴する景観スポットを観光客に効率的に体験させるところにある。



ニースは世界的に有名な保養地・観光都市でカーニバルなどでも有名、今回は創造都市の視察が中心であったが、ニースのまちづくりは公共交通と歩行者を優先する整備であり大分にとってたいへん興味深いため交通面でも視察報告を行う



路面電車が廃止されていたが、2007年に全長8.7kmのLR T1号線が新たに開業した

架線がカーニバルの邪魔になるため、カーニバル会場をまったく区間のみを架線レス

カーニバル会場のため架線レスとなるガリバルディ広場



カーニバル会場のため架線レスとなるマセナ広場

ニースを代表する高級ホテル・ネグレスコ

パイヨン・プロムナードに面する図書館



工事中の「パイヨン・プロムナード」中心市街地の遠距離バスターミナルや駐車場を移転させて総延長1.2kmに及ぶ大規模な歩行者空間の整備が進行中であった

旧市街ではオープンカフェなども多く郷土料理ソッカなど食文化も楽しめる

## 第4章 欧州文化首都

### 1. 欧州文化首都とは

EUでは毎年、域内の特定の都市を「欧州文化首都」と定め、さまざまな芸術・文化プログラムを1年間にわたって開催している。欧州文化首都に選定されることは「創造都市」のメルクマールの一つといえる。

欧州文化首都の制度は、真の欧州統合には政治・経済だけでなく、文化の相互理解が不可欠であるとの認識に基づき、1985年に発足した。EUの住民が、EUを構成する各国の国民ではなく、EU全体の市民であるとの意識を高める必要があるとの考え方が、その背景にはある。欧州文化首都も、初期は現在ほどの規模ではなく、選ばれた都市におけるフェスティバルやイベント開催が中心であったが、1990年頃から特定都市という制約を外し、周辺諸都市も含めた大規模なプロジェクトに発展していった。

1990年のグラスゴー（イギリス）、2004年のリール（フランス）、2008年のリヴァプール（イギリス）などが欧州文化首都の成功事例とされており、とりわけリールは、文化・経済・政治的にさまざまな面で成功を収め、15年分の成長をその1年で実現したといわれる。

欧州文化首都の開催地は、国ベースではすでに2033年まで決まっている。近年では、西欧・東欧から各1ヶ国が毎年選ばれており、次の段階として、それらの国々のどの都市を開催地とするかが国内で競われるが、この開催都市は2017年まで決まっている<sup>6</sup>。こうした中、2013年の欧州文化首都に選ばれたのが、マルセイユを中心とするプロヴァンス地方（フランス）とコシツェ（スロヴァキア）である。プロヴァンス地方では「マルセイユ・プロヴァンス 2013（MP 2013）」のタイトルのもと、さまざまな文化的催しが目白押しであり、新たに多数の美術館・博物館が開館しつつある。

以上のような経緯を踏まえて、今回の視察ではOPAMのプレ事業や開館時イベントのあり方を考えるうえで、欧州文化首都に沸くプロヴァンス地方を訪ねることとした。欧州文化首都の諸事業の中心となるのは、フランス最大の港湾都市マルセイユ（人口83万人）。プロヴァンス・アルプ・コート・ダジュール地域圏の首府にして、ブーシュ・デュ・ローヌ県の県庁所在地でもある。マルセイユには、MP2013全体を統括する本部が設けられているため、視察ではまずここを訪ねて話を伺うこととした。

一方、MP2013のプロジェクトは、マルセイユ以外にも、アルル、エクス・アン・プロヴァンス、オーバーニュ、カルダヌ、イストル、マルティエグ、サロン・ド・プロヴァンスなど、ブーシュ・デュ・ローヌ県のほぼ全域を会場としている。そのため今回は、マルセイユ以外に、近郊にある中小都市エクス・アン・プロヴァンス（人口14万人）もあわせて視察した。



マルセイユ・プロヴァンス2013のオープニング エクス・アン・プロヴァンス、ミラボー通りの街路樹を使った草間彌生のインスタレーション作品”Ascension of Polka Dots on Trees”（2013年1月12日～2月17日）EU・ジャパンフェスト日本委員会ウェブサイトより

<sup>6</sup> 同友会が2012年に視察したサン・セバスティアン（スペイン）は、2016年の欧州文化首都に選定されている。大分経済同友会2013を参照。



## 2. ユーロメディテラネ構想

プロヴァンス地方が 2013 年の欧州文化首都となったことは承知していたが、その背景となるマルセイユの都市戦略については、視察前に十分な情報を入手することができなかった。一方、最近発表された鳥海 2014 には、マルセイユの都市戦略の全体像が詳細に報告されている。このため MP2013 の視察報告を行う前に、主にこの論文に依拠しながら、マルセイユの都市再生戦略「ユーロメディテラネ構想」を概観しておきたい。なお、事実誤認や不適切な要約などがあれば、筆者の責に帰するものである。

マルセイユは、フランスではパリに次ぐ人口を擁する都市であり、良港に恵まれ商工業が発展したものの、それらの既存産業が斜陽化する中で、高級海洋リゾートの地位はニースに、ナレッジ・シティ（知識階級都市）の地位は郊外のエクス・アン・プロヴァンスに奪われ、都市イメージを好転させる機会がなかったという<sup>7</sup>。こうした中で 1995 年にスタートしたのが、ユーロメディテラネ構想である。「欧州地中海覇権都市建設プロジェクト」とでも意識すべきこの構想は、当初計画面積 310 ha に加えて 2007 年には 169 ha が追加されるなど、マルセイユの都心部から港湾部にかけてのほとんどのエリアを対象とした大規模再開発プロジェクトである。財政面では、1995～2006 年に 3 億ユーロの公的資金を投じて 10 億ユーロの民間投資を誘発。最終的には 2020 年までに官民合わせて 70 億ユーロの投資を行い、オフィス・産業施設、商業施設、公共文化施設などの整備を行う計画である。この構想の実現を通じて、商圏人口 10 億人ともされる地中海の経済的覇者たらんとするのが、フランスの思惑であるという。

具体的なプロジェクトとしてはまず、旧市街と地中海を分断してきた国道 55 号線の 1 km にわたる地下化が挙げられる。こうして生まれたウォーターフロント・エリアに、エスプラナード（遊歩道）やポート・テラスが整備された。旧港地区にはヨーロッパ地中海文明博物館（後述）、ヴィラ・メディテラネ（後述）、アレック地区にはユーロメッド・センター（映画館を中心とした映像マルチプレックス）、ル・シロ（穀物サイロを改装したスペクタクル施設）、県立図書・公文書館などの文化施設が新たに整備された。付近にはザハ・ハディド<sup>8</sup>が設計した海運会社 CMA-CGM 社の高層ビルが聳え、周辺にはさらに高層ビルが建つ計画があるという。マルセイユの中央駅であるマルセイユ・サン・シャルル駅も、既存の駅舎を活かしながらモニュメンタルな商業モールが増築された。荒廃したベル・ドゥ・メ地区では、煙草工場跡をコンバージョンして、オーディオ・ビジュアル産業の拠点施設や文化財保存・修復センター、アーティストに廉価でアトリエを貸し出す施設「フリッシュ（荒地）」などを整備。

公共交通重視のまちづくりもはじまっている。フランスでは、路面電車の廃止が日本以上に急速に進み、1971 年には 3 都市にしか残っていなかったが、そのうちの 1 つがマルセイユである。マルセイユで最後まで残ったのはわずか 3 km 程度の区間であったが、LRT として新生するために、2004 年にいったん旧線は眠りにつく。その後の工事期間を経て、2007 年に旧線を改良・延伸した T1 系統、全線が新線の T2 系統の LRT が開業した。ボンバルディア社製の、船の船先をイメージしたデザインの特徴的である。2007 年には、LRT だけではなくレンタサイクルのシステムも導入された。

ブラウンフィールドであった 169 ha の拡張地区では、従来のユーロメディテラネ構想をベースにしつつ、エコシティのコンセプトを強く打ち出し、住宅建設を核に公園や都市施設の整備を図るとしている。この地区には LRT が延伸されるほか、在来線の新駅も建設予定であるという。

アート・文化を前面に押し出したまちづくり、歴史的建築や工場跡の文化施設へのコンバージョン、著名建築家を用いた大規模再開発、都心部における歩行者空間の創出、LRT やレンタサイクルの導入……。ユーロメディテラネ構想からは、同友会がこれまで視察したナント、バルセロナ、ビルバオ、エッセンなどの欧州諸都市の政策を総動員して、一気呵成に都市再生に取り組んだとの印象を受ける。そして、これらのプロジェクトをマルセイユ内外の人々にお披露目する総仕上げ（または中間決算）が、MP2013 だったのではないかと。

<sup>7</sup> 視察時にも、マルセイユは住民から「巨大な田舎町」と呼ばれてきたという話を、現地で聞いた。

<sup>8</sup> ザハ・ハディドは、東京の新国立競技場のコンペでグランプリに輝いたことで、わが国でも一躍有名になった。



### 3. マルセイユ・プロヴァンス2013の全体像

MP2013の事業全体を運営するのは、欧州文化首都の事業名と同じ「マルセイユ・プロヴァンス2013」の名称を持つアソシアシオン（association）<sup>9</sup>である。MP2013の本部は、マルセイユ旧港地区にあるメゾン・ディアマンテという歴史的建築の中に設けられている。本部を訪れた視察団は、国際関係コーディネーターを務めるジュリア・シュノー（Julie Chénot）氏から、MP2013の全体像に関するレクチャーを受けた。また、アソシアシオンのNo.2であるウルリッヒ・フックス（Ulrich Fucks）氏とも挨拶を交わす機会を得た。フックス氏はドイツ人で、2009年の欧州文化首都であったリンツ（オーストリア）で手腕を発揮したことから、MP2013にも登用されたそうである。以下、シュノー氏のコメントや文献資料などを参照しつつ、MP2013の概要を紹介していくが、事実誤認などがあれば筆者の責に帰するものである。

シュノー氏の仕事がスタートしたのは、マルセイユが欧州文化首都に立候補する書類を提出する以前の2007年であったという。この時点で、2013年の欧州文化首都の開催国として、フランス、スロヴァキアの2ヶ国が選ばれていた。ちなみに今回を逃すと、次にフランスに欧州文化首都が回ってくる機会は2028年になる。

このため、2013年の欧州文化首都開催を目指して、フランス国内では2007年に8都市が立候補した。このうち一次選考を通過したのがリヨン、ボルドー、トゥールーズ、マルセイユの4都市で、この中から2008年にマルセイユが全会一致で選ばれたという。マルセイユが選定された理由としては、提出したプロジェクトが優れていたことや、マルセイユ市単独でなく周辺都市も参加していることが挙げられる。地域の経済関係者、自治体関係者が全員集まってMP2013のプロジェクトを立ち上げたことも好評価であった。さらに、港湾都市マルセイユは地中海沿岸諸国との交流の歴史を持ち、対岸の国々も含む「南の共有」というテーマをプログラム構成の根幹に据えたことで、欧州全体にアピールできると考えられたことも大きい。最後に、マルセイユは人口規模でパリに次ぐ大都市ながら、リヨンやボルドーに比べると経済発展が遅れていたため、欧州文化首都を通じて遅れを取り戻そうという意図もあったようだ。

2008年に欧州文化首都に選ばれて以降、実行組織であるMP2013がアソシアシオンとして立ち上げられ、5年をかけて準備が進んできた。アソシアシオンのトップは、マルセイユの商工会議所の会頭であり、経済界はMP2013に大きく貢献している。アソシアシオンの予算は、2008～13年で総額9.1千万ユーロ。資金調達に際しては、70%を行政（フランス政府、地域圏、県、マルセイユ市、エクス・アン・プロヴァンス市など）、15%を民間（経済団体など）、12%をフランス政府の各省庁、3%をEUが拠出している。また、資金支出については、70%がプログラムのイベント運営、18%が人件費・管理費（イベント関連費用を除く）、12%がコミュニケーション費用（広告宣伝、マスコミ対応など）に充当されている。コミュニケーションに要する予算は不足しており、広報面では行政にも手助けをしてもらっているという。

MP2013のプログラムを見ていくと、プロヴァンス地方の外からアーティストをマルセイユなどに招き、各所で地域とつながった創作活動を行っている実態が分かる。MP2013のプログラムは約1,000プログラムで、それらを掲載したパンフレットは頁数が360頁に及ぶ。ただし、これらのすべてをMP2013本部が直接実施しているわけではなく、公共機関や民間団体などが実施主体になっているものも多い。

日本からも、アーティストの草間彌生（エクス・アン・プロヴァンスのミラボー通り）、川俣正（アルルのカマルグ美術館）、ダンサーの池田亮司（エクス・アン・プロヴァンスのヴァザルリ・ファンデーション）などがMP2013に参加している。また、アルルのカマルグ地域はフランスで唯一米が栽培されている地域であり、日仏のアーティスト、農家による「田んぼアート」も実施されている。

また、アソシアシオンの予算とは別枠で、2013年に向けてさまざまな建築投資も行われた。この中にはMP2013にあわせて計画されたプロジェクトもあるが、それ以前から計画されていた施設も多い。10年かけて実現しなかった事業が、欧州文化首都選出を契機に一気に加速した面があるという。建築投資のうち、特に巨大なのがヨーロッパ地中海文明博物館だが、その他にもさまざまな施設が開館しており、これらの建築物に対する投資だけでも6.5億ユーロに及ぶ。その他にもノーマン・フォスターの設計した旧港プロムナードなどがあるが、これらの予算は6.5億ユーロの外数である。

MP2013の見学者数は2013年1～4月で200万人に達したが、マルセイユの住民がほとんどを占めており、

<sup>9</sup> アソシアシオンとは、フランスのアソシアシオン法（1901年法）に基づく非営利協会のこと。

国外からの観光客はまだ少ない。MP2013 がスタートした1月12日はさまざまなイベントが催されたため、その日だけで40万人の人出があった。5月3～4日にも、マルセイユの近くで夜間に松明を灯す大きなイベントがあり、20万人が繰り出した。マルセイユは治安面で危険な都市とされることがあるが、そうしたイメージを払拭するようにイベントは何の諍いもなく終了した。

なお、マルセイユ・プロヴァンス地域の2012年の観光客数は800万人であり、2013年にはこれを1,000万人とすることを目標としている。ただし、フランスにおける観光客の計上方法は、当地で最低でも一泊を過ごすことが条件であり、近隣から来る日帰り客は対象とならない。5～6月を過ぎると、地元以外のフランス国内外からの宿泊客が増えるものと期待している。

## 4. マルセイユのプロジェクト

空港から旧港地区に車を走らせると、目前に一棟の高層ビルが見えてくる。ザハ・ハディド設計のCMA-CGM本社ビルである。かつての倉庫街跡地を再開発したもので、この地区ではさらに高層ビルを開発して全体を一新する構想であったが、地元からの要望もあり、倉庫街の施設の一部はリノベーションして保存する方針に変更されたようだ。

そして到着した旧港地区には、MP2013 に合わせて屋外にさまざまな現代アートのオブジェが設置されていた。カラフルなペインティングを施した動物の彫刻群が目立つ。特筆すべきは、ノーマン・フォスターが設計したオンブリエールで、1,000㎡の面積を持つ長方形の屋根を直径27cmの華奢な柱8本で支えた構造物である。ステレンレス・パネルを磨き上げた天井が鏡面となって、天地反転した旧港の景色がそこに映りこむ。仕組みはまったく異なるが、旧市街の風景を普段とは異なる視点から鑑賞する景観装置として、前回視察で訪れたボルドーの「水鏡」を連想した。

また、すでに述べたように、MP2013 にあわせてマルセイユの中心部ではさまざまな文化施設がオープンしている。当初の旅程ではMP2013 本部で話を伺った後、これらの施設を幾つか見学する予定であったが、視察当日はフランスの空港管制官のストライキがあり、スペインからマルセイユへの到着時刻が大幅に遅延した。このため、MP2013 でのレクチャーを終えた時刻には、残念ながらパビヨンM以外の施設は閉館時間を迎えており、施設外観を眺めるにとどまった。このため以下では、文献資料をベースに各施設を簡単に紹介することとした。

**パビヨンM** 旧港地区の市庁舎裏に建つ総合インフォメーションセンター。地上3階、地下2階で延床面積は3,000㎡。MP 2013 のメインゲートとしての役割を果たすパビヨン（パビリオン）である。地上階には、総合案内、土産物屋、イベントスペースなどが設けられ、地下階では、マルセイユ市やプロヴァンス地方の歴史・産業・文化・食などを展示物や映像で紹介している。

**J1** マルセイユ港の埠頭に建つ巨大倉庫で、欧州文化首都事業のためにイベントスペースへとコンバージョンされた。建屋上階には6,000㎡のオープンスペースが拡がり、そこに2,500㎡の展示スペースや、ギャラリー、インフォメーションセンター、ブックショップ、レストランバーが設けられている。

### ヨーロッパ地中海文明博物館 (Musée des Civilisations de l'Europe et de la Méditerranée=M u C E M)

2013年6月に、旧港ジョリエット地区のJ4埠頭に開館した巨大ミュージアム。3階建てで延床面積は4.4万㎡、総工費は1.7億ユーロにのぼる。2005年に閉館したパリの民衆芸術伝統博物館の全収蔵品、人類博物館に由来する作品の一部を受け継ぐとともに、2万点の新規収蔵品が加わり、先史時代から今日に至る地中海世界の文化・社会・政治風景を鑑賞することができる。建築家ルディ・リッチオッチェイの設計したMuCEMは、外見こそシンプルな直方体ながら、ガラスを多用した開放感あふれる建物の外郭を、網目状のコンクリート・ファイバーが全面的に覆う独特の構造をしている。網目を通過して館内に射しこむ光と影のコントラストが、MuCEMを包む空間に独特の存在感を与える。マルセイユの歴史的モニュメントであるサン・ジャン要塞とも橋で連結され、要塞内部も作品の展示スペースとして活用されている。視察直前の6月7日（金）に開館したばかりだが、週末だけで6万人の来場者が詰めかけたという。

**ヴィラ・メディテラネ** かつての地中海地域センター (Centre Régional de la Méditerranée=C e R e M) を新たに建て替えた施設で、2013年4月に開館。最上階の4階部分を宙吊りにしたアンバランスな構造が特徴的である。展示スペース、国際会議場などから構成され、地中海地域の文化交流センターとして機能する。

**プロヴァンス視点美術館** 老朽化により取り壊しが予定されていたマルセイユ港保健センターを、MP2013 を契機に改修し、2013年3月に開館した美術館。保健センターはかつて、海外から襲来する伝染病の防波堤という重要な役



割を担った施設であり、そうした歴史的経緯も含めて美術館に「プロヴァンスの視点」という名が冠されたようだ。

**PACA地域圏現代美術基金センター (Fonds Régional d'Art Contemporain PACA = FRAC)**

フランスでは、地方行政の最大単位である地域圏が主体となって現代美術振興を支援する「現代美術基金」という文化政策が導入されている。マルセイユを首府とするプロヴァンス・アルプ・コート・ダジュール (PACA) 地域圏の現代美術基金が、2013年3月に旧港ジョリエット地区にオープンさせた新しいセンターがFRACである。設計者は日本人建築家の隈健吾。美術館は8階建てで、2つの展示スペース、ホール、図書館、カフェ・レストラン、アーティスト用レジデンスを備えている。



マルセイユはパリに次ぐ人口の都市であり、良港に恵まれ商工業が発展したが、それらの産業が途絶化する中で、高級海洋リゾートの地位はニースに、ナレッジ・シティの地位は郊外のエクス・アン・プロヴァンスに奪われ、都市イメージを好転させる機会として欧州文化首都を利用



マルセイユ・プロヴァンス 2013 国際関係コーディネーター、ジュリア・シュノー (Julie Chénot) 氏

パビヨンM 総合インフォメーションセンター

旧港地区にはパブリックアートが並ぶ



子どもにも人気のパブリックアート

ノーマン・フォスターの作品 ステレンレス・パネルの天井が鏡面となり天地反転した景色が映る

ヴィラ・メディテラネ かつての地中海地域センターを建て替えた地中海地域の文化交流センター



ヨーロッパ地中海文明博物館 (MuCEM) 2013年6月に開館した巨大ミュージアム。3階建てで延床面積は4.4万㎡、総工費は1.7億ユーロにのぼる。2005年に閉館したパリの民衆芸術伝統博物館の全収蔵品、人類博物館に由来する作品の一部を受け継ぐとともに、2万点の新規収蔵品が加わり、先史時代から今日に至る地中海世界の文化・社会・政治風景を鑑賞することができる。マルセイユの歴史的モニュメントであるサン・ジャン要塞とも橋で連結され、要塞内部も作品の展示スペースとして活用されている。ルディ・リッチオッティの設計





PACA地域圏現代美術基金センター（FRAC）



路面電車をLRT化するなど公共交通重視の取り組みも始まった



小型コミュニティ・バス



バリアフリーの小型コミュニティ・バスは大分でもまちなか巡回バスや利用者が少ない地域で利活用が期待できる

## 5. エクス・アン・プロヴァンスのプロジェクト

エクス・アン・プロヴァンスは、プロヴァンス伯爵領の首都として栄えた古都であり、まちなかには歴史的な街並みが残されている。また、街のいたるところで水が湧き出ており、郊外を含めると 200 を超す湧泉があるという。画家ポール・セザンヌの出身地としても知られ、現存するセザンヌのアトリエなどは観光名所となっている。こうして現在では、エクス・アン・プロヴァンスは、歴史的興味にあふれた学術・芸術の街として多くの観光客でにぎわうようになった。文化的にも経済的にも恵まれた環境を持つことから、小さな都市であるにも関わらず、中心部の家賃はパリについて高いといわれる。

このエクス・アン・プロヴァンスのメインストリートとなるのが、街の中心部を東西に走るミラボー通りであり、その北側が商業地区となっている。ミラボー通りの総延長は 400m ほどで、プラタナスの並木道となっている。通りの東端は旧市街を走る細い街路へとつながり、西端にはロンド大噴水を中心島とするラウンドアバウト（円形交差点）が設けられ、そこから郊外へ通じる道路が伸びている。

ミラボー通りの車道は現在、両側 2 車線であるが、歩道空間は車道よりもはるかに広大に確保され、歩行者重視の街路となっている。沿道には瀟洒なオープンカフェが軒を並べ、市民や観光客でたいへんにぎわっていた。この通りの舗装状況や並木の配置を見ると、どうも当初は 6 車線ほどの幅があった車道部分を段階的に減らしていったようである。

ミラボー通りには何ヶ所か交差点が設けられているが、そこでは車道の真ん中に大きな岩塊が据えられ、車がスピードを出せないようになっている。苔で覆われたこの岩は噴水にもなっており、ミラボー通りの特色ある都市景観を演出している。また、ミラボー通りの東端にはライジングボラードも設けられていた。ライジングボラードは車両の進入を防ぐポールだが、ポール脇の車両進入許可機を操作すればポールが地面に潜りこみ、車両の出入りが可能になる。前回視察の際に、ボルドーで見かけたものと同じ仕組みである。こうしたシステムを導入することで、ミラボー通りから旧市街への車両進入を抑制している姿が明らかになってきた。

このようにしてエクス・アン・プロヴァンスは、ミラボー通りを中心にきわめて歴史的かつ活気のある街並みを実現しているが、そうした伝統のまっただ中に現代アートの魅力を投入することにも意欲的である。2013 年初頭、エクス・アン・プロヴァンス中心市街地の屋外空間を舞台に、現代アートフェスティバル「場」の芸術 (L'art à l'endroit)」展が開催され、MP2013 のオープニングを飾った。「現代アート・トレイル (Parcours d'art contemporain)」というサブタイトルからも窺えるように、アート作品はエクス・アン・プロヴァンスの歴史的街並みの随所に設置され、来場者はまちなかを散策しながら、現代アート作品と同時にこの街の重ねてきた歴史

をも体感することになる。都市の人口規模や、街歩きを促すアートイベントという性格を踏まえると、わが国の芸術祭では、別府の「混浴温泉世界」がもっとも近いかもしれない。

招聘アーティストは 11 名であるが、もっともインパクトある作品は、日本人アーティスト草間彌生による大規模なインスタレーション「昇天する木々の水玉 (Ascension of Polka Dots on Trees)」だと思われる。ミラボー通りのシンボルであるプラタナス並木が、草間の水玉模様に覆い尽くされたのだ。あいにくフェスティバルの会期は 1 月 12 日～2 月 17 日であり、視察団はその光景を実見することはできなかったが、昼食で立ち寄ったまちなかのレストランで女将に聞いてみたところ「とても綺麗だった」と感想を漏らしていた。

大分市美術館が 2013 年に開催した草間彌生展でも、展示作品は美術館内にとどまらず、大分の中心市街地にも飛び出していったことは記憶に新しいが、古都エクス・アン・プロヴァンスもまた、そうした取り組みを大胆かつ大規模に行っていたのだ。



エクス・アン・プロヴァンスは、学術・芸術の街としてにぎわうようになり文化的にも経済的にも恵まれ、小さな都市だが中心部の家賃はパリについて高いといわれる

街のいたるところで水が湧き出ている



ミラボー通りの車道は現在、両側 2 車線であるが、歩道空間は車道より広大に確保され、歩行者重視の街路。沿道にはオープンカフェが軒を並べ、市民や観光客でにぎわう。この通りの舗装状況や並木の配置を見ると、どうも当初は 6 車線の幅で車道部分を段階的に減らしていったことがわかる



ミラボー通り車道の真ん中に噴水を配して車のスピードを抑制する



にぎわうオープンカフェ



広い歩道で芸術活動が行われている



進入許可機付きライジングボラードで車両の進入を制御する



乗客 2 人乗りの小型巡回型コミュニティ・バス。大分でもまちなかだけでなく、郊外の公共交通機関との乗り継ぎ連携などで期待できるかもしれない





## 第5章 アートの拠点施設

本章では、今回の視察で訪れた美術館などのアートの拠点施設について報告する。冒頭でも触れたように、視察先を選定した基準は、世界に通じる美術館、近現代アートに力を入れた美術館、新しく整備され注目を集めている美術館の3点である。

### 1. バルセロナ

バルセロナの旧市街では、現代アートを専門とするバルセロナ現代美術館、芸術文化の領域横断的な企画展示に特色のあるバルセロナ現代文化センターを視察した。両施設は前述したラバル地区の都市再生の観点からも興味深い施設である。また、旧市街からは少し離れるが、モンジュイックの丘の麓にある、地元金融機関の運営する美術館カイシャ・フォーラムにも短時間ながら立ち寄る機会を得た。

#### (1) バルセロナ現代美術館 (MACBA)

バルセロナ現代美術館 (Museu d'Art Contemporani de Barcelona=MACBA) は、1995年に旧市街のラバル地区に開館した美術館で、主に20世紀後半以降の美術作品を展示している。設計者は、米国の有名な建築家リチャード・マイヤー。ファサードがガラス窓となった開放的な白亜の建築で、館内には陽光が射しこむ。こうした佇まいは、どこことなくOPAMを彷彿とさせるところがあるが、MACBAのガラス窓は固定式で、OPAMのそのように自由に開閉するわけではない模様。

バルセロナへのオリンピック招致が決まった1986年はバルセロナにとって特別な年であり、1992年の開催に向けてさまざまな公共事業が実施されたが、MACBAの建設もそうした中で計画が進められた。MACBAは当初、一般市民による現代アートのコレクション形成としてはじまったもので、そのための民間組織として1987年にMACBA財団が設立された。その後カタルーニャ州、バルセロナ市が参加し、3者によるコンソーシアムによってMACBAは運営されている。建物はコンソーシアムが所有しており、建設費用は州・市が出資した。一方、コレクションはMACBA財団が購入して美術館に預託・展示を行っている。

既述のようにMACBAは、ラバル地区のスラム・クリアランスを通じて、美術館前広場とともに建築が進められた。治安が悪く衛生面でも劣悪な環境下に白亜の美術館が唐突に生まれ、当初は「掃き溜めに鶴」といった印象でブーイングの声も聞かれたが、その後、地元に関われた美術館プログラムを推進したことで「愛される美術館」へと変わっていったという。

建物は3階建てで、延床面積は14,300㎡。1階はコレクションの常設展示にあてられている。ただし、約6千点あるコレクションのすべてを固定展示するわけではなく、1年毎に作品を変えて展示している。2階では企画展示を行っているが、定番のテーマ・手法・運動に基づいた展示ではなく、これからのアートの問題提起となるような展示を企図している。たとえば視察時には、都市開発をテーマにした「オリンピック以降のバルセロナの肖像」という写真展と、現代の情報過多社会を写真を通じて問題提起する展覧会とを同時に開催していた。こうした二つの展覧会をぶつけることで、両者の関係の中から議論を起こしていく効果を期待しているとのこと。この他にも、米国のコンセプチュアル・アーティスト、ローレンス・ウェイナー (Lawrence Weiner) の作品展示を行っており、さらに、カタルーニャ出身のアーティスト、エウラリア・グラウ (Eulàlia Grau) の作品展示は、フェミニズム運動の観点から抑圧的なフランコ時代をコラージュによって表現していた。

リーマン・ショック以降はMACBAの財政状況も厳しく、予算がカットされて職員も1割減少したという。しかし、公共の予算は減っているが、入場者数は少しずつ増加しており、年間の来館者数は70万人程度である。特定の期間に訪れた一般市民に年間チケットをプレゼントするなど、アートに興味のある市民に安価に年間チケットを提供する試みも行っているようだ。

#### (2) バルセロナ現代文化センター (CCCB)

バルセロナ現代文化センター (Centre de Cultura Contemporània de Barcelona=CCCB) は、MACBAに隣接して建つバルセロナの中核的文化センター。CCCBの建物は、19世紀からこの場所に建っていた救護院

「慈善の家」をコンバージョンしたものである。コンバージョンを担当したのは、地元建築家のエリオ・ピニオン (Helio Piñón) とアルベルト・ビアブラーナ (Albert Viaplana) であった。

CCCBに入館するには、まず建物の中庭に入る必要がある。中庭は四囲が建物に囲まれているが、3面が歴史的な趣のある建築であるのに対して、1面のみ壁面全体がガラスに覆われたモダンなビルディングとなっている。このガラス壁面の上部は中庭に向けて傾斜しており、そこにバルセロナの市街地風景が映りこむのが印象的であった。CCCBの運営主体は、バルセロナ市とバルセロナ県が出資するコンソーシアムで、1988年に組織が設立され、施設がオープンしたのは1994年のこと。施設の延床面積は15,000㎡で、うち4,000㎡が展示場にあてられている。

CCCBでは、文化・映画・フェスティバルなどをテーマに、他の文化施設ではあまり例をみない展示が試みられており、視覚化しにくい社会の変化、哲学などもビジュアルに展示しているという。視察時は、イタリアの映画監督パゾリーニに焦点をあてた「パゾリーニ・ローマ (Pasolini Roma)」展や、チリの小説家・詩人ロベルト・ボラーニョ (Roberto Bolaño) をテーマとする「ボラーニョ・アーカイヴ (Arxiu Bolaño) 1977-2003」展が開催中であった。MACBAの展示が現代アートを中心としていたのに対して、CCCBはさまざまな文化芸術領域を横断した企画展示に特徴があるようだ。実は、隣接するMACBAとCCCBを視察した背景には、大分県芸術文化ゾーンのあり方 (美術館と文化センターの連携協働) を考えるうえで参考にならないかという問題意識があったのだが、こと「異なるジャンルの芸術文化の融合」という面ではCCCBの取り組みが先進的であるように感じた。またCCCBでは、市民が無料で使えるデジタル・アーカイヴも人気があり、オーディオ・ビジュアルのライブラリーとして質が高く市民にとっての穴場となっているという。

このように意欲的な取り組みを進めるCCCBだが、今後の活動については不安要素も抱えている。開館以来、長らく館長の任にあった哲学者・ジャーナリストのジョセフ・ラモネーダ (Josep Ramoneda) が、2011年末に突然解任されたのだ。CCCBの多彩なプログラムはすべて彼の頭の中から生まれたものといわれ、職員の中には「ラモネーダのいないCCCBなど意味がない」と嘆く者もいるとのこと。2014年頃までのプログラムは、ラモネーダが敷いた路線上で進んでいるため、新館長の力量が問われるのはその後だといわれている。ラモネーダは現在、ジャーナリストとして活動すると同時に、執筆・講演も精力的にこなしている。

こうしたラモネーダ解任劇の背景には、政治情勢の変化があるという。スペイン民主化後のバルセロナ市では社会労働党の左派政権が長らく市政を担ってきたが、2011年の選挙で、右派のカタルーニャ地域主義政党への政権交代が起きたのだ。ラモネーダは、カタルーニャ文化に偏ることのないコスモポリタンの企画運営を行ってきたが、そうした姿勢が現政権と相容れなかったとの観測もなされているらしい。また、総じて前政権は文化に理解があったが、現政権は文化への関心が薄く、金融危機以降はさまざまな面で文化セクターが打撃を被っていると聞いた。

### (3) カイシャ・フォーラム

カイシャ・フォーラム (Caixa Forum) は、バルセロナに本社を置く貯蓄金庫 (Caja de Ahorro) であるラ・カイシャ (La Caixa) が所有する美術館である。スペインの貯蓄金庫は、地方政府の代表者などが運営する非営利の財団だが、商業銀行とも比肩する規模に発展している。ラ・カイシャは、バルセロナ貯蓄金庫 (1844年設立) とカタルーニャ年金金庫 (1904年設立) が1990年に統合して生まれた貯蓄金庫で、スペインではサンタンデル・セントラル・イスパノ銀行、ビルバオ・ビスカヤ・アルヘンタリア銀行に次いで3番目に規模が大きい。

貯蓄金庫は通常の銀行と異なり、利益を地域社会へ還元する義務を負っており、カイシャ・フォーラムの運営もその活動の一環である。バルセロナ市民の8割はラ・カイシャに口座を持っているが、彼らは無料でカイシャ・フォーラムに入館できる。ラ・カイシャは他にもコスモ・カイシャという科学館を運営し、さらにソーシャル・ハウジングや職業訓練施設など、ハード、ソフト両面でさまざまな社会貢献活動を行っている。インターネットの普及を受けたパソコン教室も人気だ。

カイシャ・フォーラムはもともと繊維工場として20世紀初頭に建てられたカサラモナ工場を美術館に転用したもので、元からある工場を設計したのは、モデルニスモの建築家として名高いカダファルク。そして、2002年にそのリノベーションを担当したのが、大分出身の建築家、磯崎新である。磯崎が新たにデザインしたのは、美術館のエントランスと来館者受付スペースであるとのこと。

視察時のフォーラムでは、フランスの映画監督メリエスを扱った「ジョルジュ・メリエス 映画の魔術 (Georges Méliès. La magia del cine)」展が開かれていた。フォーラムでは、子ども向けのワークショップに力を入れており、メリエス展に合わせて映画をつくるワークショップなども行った模様である。また、前回視察でビルバオを



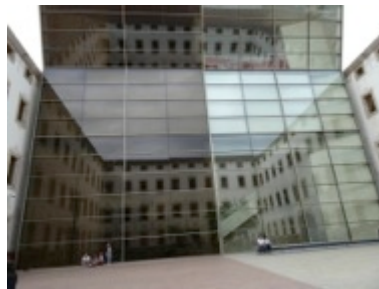
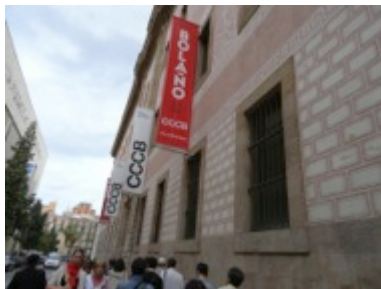
訪れた際、ビルバオ・グッゲンハイム美術館で当社コレクションも用いた企画展が開かれていたが、この展覧会はバルセロナ、ビルバオ、中国、日本、フィリピンと巡回しているとのこと。政治情勢の変化にともない、バルセロナの文化行政が岐路を迎えている時期だけに、民間ベースで文化事業を行うラ・カイシャの社会貢献活動の重要性が増しているようだ。

ちなみに、道路を挟んでカイシャ・フォーラムの向かい側は 1929 年バルセロナ万博の開催地であり、そこには万博のドイツ館であったバルセロナ・パビリオンがある。bauhausの校長も務めたミース・ファン・デル・ローエの設計になるこのパビリオンは（モデルニスモではなく）モダニズムの代表的な建築だ。ただし、パビリオンは会期終了後に一度取り壊されており、現在あるのは 1989 年に再建された建物である。



バルセロナオリンピック開催にあわせ旧市街の治安・衛生面を回復させるため老朽建築を撤去してバルセロナ現代美術館（MACBA）を建設 リチャード・マイヤーの設計

MACBA では現代アートを中心とした展示を行っている



バルセロナ現代文化センター(CCCB)19世紀からこの場所に建っていた救護院「慈善の家」をコンバージョン 中庭は四囲が建物に囲まれて3面が歴史的な建築であるが1面のみ壁面全体がガラスに覆われたモダンな建築 ガラス壁面の上にバルセロナの市街地風景が映りこむのが印象的



バルセロナ現代文化センター(CCCB)内部

カイシャ・フォーラム (Caixa Forum) は、バルセロナに本社を置く貯蓄金庫 (Caja de Ahorros) であるラ・カイシャ (La Caixa) が所有する美術館



カイシャ・フォーラムはもともと繊維工場として 20 世紀初頭に建てられたカサラモナ工場を美術館に転用したもので、元からある工場を設計したのは、モデルニスモの建築家カダファルク そして、2002 年にそのリノベーションを担当したのが、大分出身の建築家、磯崎新

## 2. マドリド

南蛮文化発祥の地であるスペインの美術は、OPAM の企画展のあり方などを考えるうえで参考になると思われる。このため今回の視察では、スペイン美術の宝庫であるマドリドの主要なアートコレクションを概観することとした。具体的には、プラド美術館、ソフィア王妃芸術センター、ティッセン・ボルネミッサ美術館というスペインを代表する三大美術館である。これらの美術館はいずれも、マドリド中心部のアトーチャ駅やレティーロ公園の周辺に立地し、相互に 500m ほどしか離れていない。

この美術館エリアから 1 km ほど南下した場所にある現代アートセンター「マタデロ・マドリド」も短時間ながら視察を行った。巨匠のコレクションに特色のある三大美術館に対して、生きのいい現代アートや、バレエ・ダンスの拠点として近年オープンしたアートセンターである。過去の視察で訪れた施設では、ビスケット工場をアート拠点に転用したナントのリユ・ユニック (大分経済同友会 2011a、2013) にイメージが近いかもしれない。

### (1) プラド美術館

国立プラド美術館は、スペイン国王フェルナンド 7 世が自費を投じて 1819 年に創設したもので、開館当時は「王立絵画美術館」と呼ばれていた。新古典様式の建築はファン・デ・ビリャヌエバの設計になるもので、当初は自然史博物館として使用される予定だったが、その目的には用いられないまま、美術館として開館したという。作品を一般に公開する美術館としてはルーヴル美術館 (1793 年開館) の方が早い。ルーヴルが、フランス革命により王侯貴族から徴用したコレクションをもとに設立されたのに対して、プラドは、国王自らが開設した点に大きな違いがある。

プラド美術館の収蔵品の基礎となったのはスペイン王室のコレクションで、展示は当初、スペイン人画家の作品のみからなる 311 点ではじまった。このため現在も、スペイン絵画のコレクションがもっとも充実しており、エル・グレコ、ベラスケス、ムリーリョ、ゴヤなどスペイン絵画の巨匠の作品が汗牛充棟である。一方で、他国の画家の作品も開館間もなく、王室ゆかりの宮殿などから集められるようになり、現在ではイタリア、フランドル、オランダ、フランス、ドイツ、イギリスなど広く欧州絵画を展示しており、ティツィアーノ、ヒエロニムス・ボス、ルーベンスなどのコレクションが充実している。3 万点以上の絵画・彫刻を収蔵し、常設展示だけでも約 1,400 点に及ぶなど、欧州屈指の美術館といえる。

なお、収蔵品の拡大にともない、手狭となったビリャヌエバ館は数次にわたり拡張工事が加えられてきたが、それも限界に達したため、2007 年に新館としてヘロニモス館が開館した。建築家ラファエル・モネオの設計により、隣接するロス・ヘロニモス修道院の回廊部分を美術館の一部に組みこんだものである。ヘロニモス館は展示室 (A~D の 4 室)、講義室、ホール、カフェ、ミュージアムショップから構成され、展示室は特別展に使用されているようだ。

視察当時、ヘロニモス館の特別展示室では「秘匿の美 フラ・アンジェリコからフォルトウニーまで (La belleza encerrada. De Fra Angelico a Fortuny)」という展覧会が開催されていた。プラド美術館の収蔵品のうち、小品ながらも優れた作品 281 点を陳列した企画展だが、驚いたのは展示の仕方である。展示室の壁に開いた穴から隣室に飾られた彫像を覗き見したり、壁に開いたスリットから奥の壁に掛けられた絵画の一部を垣間見たり、はたまた、通常は壁に掛けられる絵画がテーブル上に広げて展示されるといった具合である。作品自体は歴史的名画・彫刻であるのに、展示の方法が随分と風変わりなのだ。こうした展示方法が効果をあげているか否かの判断はさておき、古典芸術の殿堂たるプラド美術館でも、あたかも現代アートを思わせる斬新な試みがなされているのは、たいへん興味深かった。



スペイン国王フェルナンド 7 世が自費を投じて 1819 年に創設し、収蔵品の基礎となったのは王室のコレクションでスペイン絵画が充実しているが現在では広く欧州絵画も展示しており 3 万点以上の絵画・彫刻を収蔵、常設展示だけでも約 1,400 点に及ぶ欧州屈指の美術館



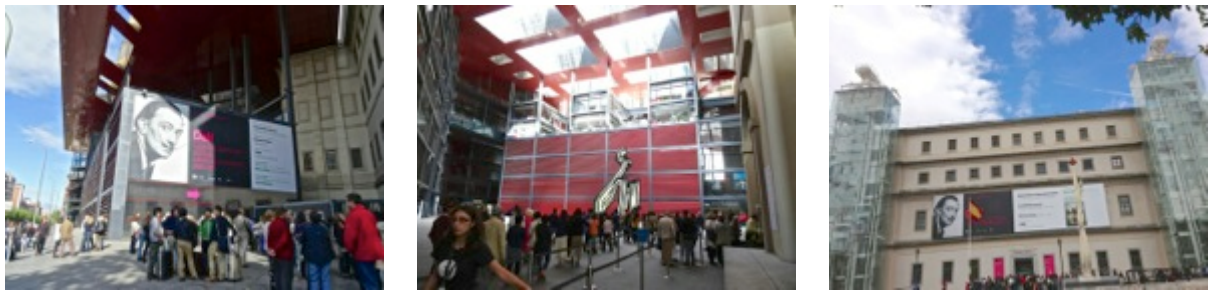
## (2) ソフィア王妃芸術センター

ソフィア王妃芸術センターは、19世紀末から現在に至るモダンアート、現代アートの収蔵・展示に特化した国立美術館であり、収蔵作品は1.8万点に及ぶ。19世紀までの歴史的絵画・彫刻を中心とするプラド美術館とは、明快に役割を分担している。ピカソ、ダリ、ミロ、タピエスなど、20世紀を代表する巨匠の作品が数多く展示されているが、もっとも有名な収蔵品はピカソの「ゲルニカ」だろう。

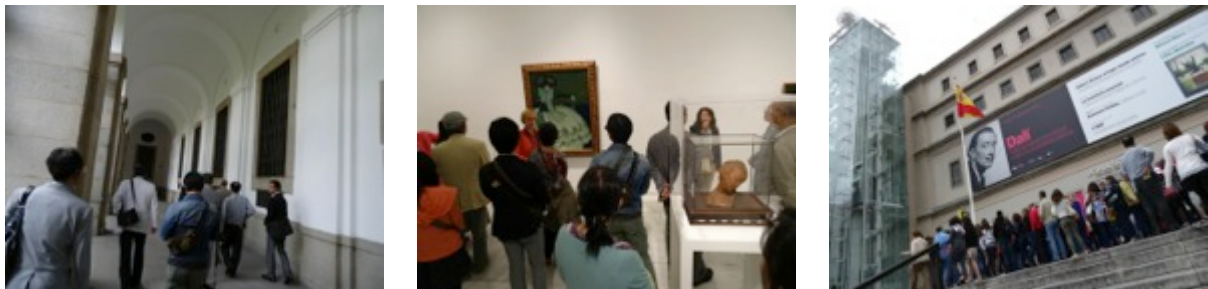
1986年にアートセンターとして開館した後、1990年に国立美術館となったが、建屋自体は18世紀末にフランチェスコ・サバティーニ設計で建てられたマドリッド総合病院を再利用したものである。プラド美術館、ティッセン・ボルネミッサ美術館の建物と同様、当時の首都再開発計画の一環として建てられたという。

この建物は改修を繰り返したが、1988年に行われた工事では、建物の外側にガラスとスチールでできたシースルーのエレベーターが取り付けられ、ソフィア王妃芸術センターの大きな特徴となっている。その後、収蔵品が増えてサバティーニ館(5.2万㎡)が手狭となったため、2005年にフランス人建築家ジャン・ヌーヴェルの設計になる新館ヌーヴェル館(2.7万㎡)をオープン、現在では7.9万㎡という広大なスペースを有している。ヌーヴェル館は、格子天井に覆われた中庭を囲んで建つ特別展示館、図書館、ホールの三つの建物から構成される。

常設展示は、サバティーニ館3・5階をそれぞれ「20世紀の到来 ユートピアと紛争(1900~1945年)」「戦争は終わったのか? 分断された世界の芸術(1945~1968年)」の展示に、ヌーヴェル館2階を「内乱からポストモダンへ(1962~1982年)」の展示にあてている。サバティーニ館2・4階、ヌーヴェル館1階は特別展用のスペースとなっているようだ。私たち視察団はスケジュールの都合で常設展示のみを見学したが、視察時にはダリ展を開催中であり、この特別展を観ようとする来館者で美術館前には長蛇の列ができていた。



ソフィア王妃芸術センターは、19世紀末から現在に至るモダンアート、現代アートの収蔵・展示に特化した国立美術館であり、収蔵作品は1.8万点に及び、19世紀までの歴史的絵画・彫刻を中心とするプラド美術館とは、明快に役割を分担している



18世紀末に建てられたマドリッド総合病院をリノベーションし建物の外側にガラスとスチールでできたシースルーのエレベーターが取り付けられるなど増築を繰り返して現在では7.9万㎡という広大なスペースを有している 視察時にはダリ展を開催中で美術館前には長蛇の列ができていた

## (3) ティッセン・ボルネミッサ美術館

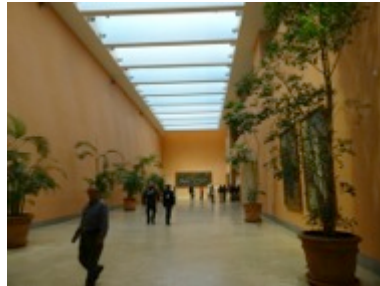
ティッセン・ボルネミッサ美術館は、ティッセン・ボルネミッサ男爵家が、ハインリッヒ、ハンス・ハインリッヒの親子二代にわたって蒐集したコレクションを展示している。ティッセン・ボルネミッサのコレクションは、個人コレクションとしてはエリザベス女王に次いで世界第2位といわれるそうだ。

息子のハンス・ハインリッヒは、バルセロナ出身の女優カルメンと結婚したことを契機に、親子二代のコレクションをスペイン政府に譲渡することを決意したとされる。1992年に美術館が開館した当初こそ、スペイン政府がティッセン・ボルネミッサ家からコレクションを借り受けるかたちであったが、その後に政府はコレクションのすべてを購入し、現在は国営の美術館として運営している。男爵夫人のカルメンもコレクターとして著名であり、自らも巨匠の作品を購入し続け、美術館のコレクション充実に貢献しているという。

ティッセン・ボルネミッサ美術館も、プラド美術館、ソフィア王妃芸術センターと同様、18世紀末に建てられ

たビリャエルモサ宮殿を拡張して用いている。改築を手がけたのは、プラドのヘロニモス館を設計したのと同じラファエル・モネオである。

この美術館は、プラド美術館やソフィア王妃芸術センターに比較すれば小振りだが、17～20世紀の絵画を中心にルーベンス、レンブラント、ゴヤ、ルノアール、モネ、ドガ、ゴッホ、セザンヌ、ホッパー、ピカソ、カンディンスキー、クレー、シャガール、ダリ、ミロ、リキテンスタインなど巨匠の名品を数多く収蔵している。また、点数こそ少ないものの、コレクションにはゴシック期やルネッサンス期の作品も含まれる。王家や国家ではなく個人コレクションがベースになっていることから、収蔵品はスペインに限らず、欧米の画家をバランスよくカバーしていることも特色である。



ティッセン・ボルネミッサ男爵家が、親子二代にわたって蒐集したコレクションを展示しており、個人コレクションとしてはエリザベス女王に次いで世界第2位といわれていたが現在は国営の美術館として運営されている



プラド美術館やソフィア王妃芸術センターに比較すれば小振りだが17～20世紀の絵画を中心に巨匠の名品を数多く収蔵している。王家や国家ではなく個人コレクションがベースになっていることから収蔵品はスペインに限らず欧米の画家をバランスよくカバーしていることも特色である

#### (4) マタデロ・マドリード

マタデロ・マドリードは、マドリード市のアルガンスエラ区にあった家畜市場兼食肉処理場（マタデロ）が郊外に移転した跡を、現代アートのセンターなどにコンバージョンした施設である。かつては廃墟となり、建物の枠組みしか残っていなかったが、その外枠を再利用しながら内部をまったく異なるかたちで再生している。

施設が不要となりはじめたのは1970年頃からで、1983年に食肉処理場の経営管理エリアの改修工事がなされ、現在はアルガンスエラ区役所として活用されている。時計台のある特徴的な建築で「カサ・デル・リロイ（時計の家）」の愛称で知られる。また、1940年に建てられたジャガイモ倉庫は、1992年に植物園へと転用された。

さらに1990～96年にかけて、牛舎跡がスペイン国立バレエ団、国立ダンスカンパニーの本部として使用されるようになり、2003年にはマドリード市議会が、食肉処理場跡を社会的・文化的な目的に活用するための計画見直しをはじめた。こうして2007～11年にかけて、食肉処理場跡はコンサートホールや多目的展示スペースからなる「マタデロ・マドリード」として甦り、現在ではマドリード市民の新たな娯楽の場となっている。

視察当日には、屋内外でさまざまな現代アート作品が展示されていた。オープンカフェも設けられ、市民でにぎわう風景がみられたほか、敷地内で結婚式なども催されていたようだ。







マドリード市の家畜市場兼食肉処理場（マタデロ）が郊外に移転した跡を、現代アートのセンターや市民の文化活動の拠点などにコンバージョンした施設 かつては廃墟となり、建物の枠組みしか残っていなかったが、その外枠を再利用しながら内部をまったく異なるかたちで再生した



1990～96年にかけて牛舎跡がスペイン国立バレエ団、国立ダンスカンパニーの本部として使用されるようになりその効果から2003年にはマドリード市議会は食肉処理場跡を社会的・文化的な目的に活用することを決定 2007～11年にかけて、食肉処理場跡はコンサートホールや多目的展示スペースからなる「マタデロ・マドリード」として甦り、現在ではマドリード市民の新たな娯楽の場となっている



結婚式が行われていた



オープンカフェ



市民が手作りグッズを販売

### 3. プロヴァンス地方

プロヴァンス地方のアート拠点については、古都エクス・アン・プロヴァンスで視察したセザンヌのアトリエ、グラネ美術館、ヴァザルリ・ファンデーションの三つの施設を概観することとしたい。

#### (1) セザンヌのアトリエ

エクス・アン・プロヴァンス最大の観光資源は、旧市街全体であるといえよう。歴史的な街並みもさることながら、まちなかに立地する瀟洒なカフェ、レストラン、商店や、市庁舎前の広場で催される市場のにぎわいといった活気あふれる街の姿が、エクス・アン・プロヴァンス観光の魅力となっている。

一方で、いわゆる観光名所として知名度が高いのは、後期印象派の画家ポール・セザンヌ（1839～1906）が晩年を過ごし、亡くなる直前まで絵画制作を続けていたアトリエであろう。旧市街から北に向かって丘陵を登ったところに立地するこのアトリエは、1954年より一般公開がはじまり、1969年には市立美術館になっている。

美術館といってもセザンヌの作品は一切収蔵されていない。しかしながら、南仏らしい緑の濃い庭の中に佇む小さなアトリエは、そのままセザンヌの絵に登場してもおかしくない風情を醸し出しており、アトリエ内部には彼が用いた画材や、静物画のモデルとなった品々が残されていて興味が尽きない。

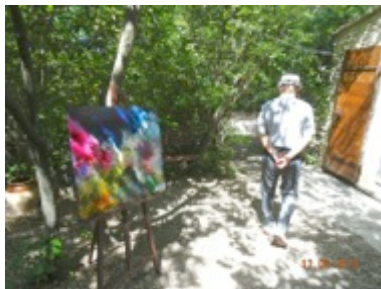
庭園にはさまざまな樹木や草花が繁茂し、庭というよりも雑木林のような状態になっていたが、おもしろいことにその随所にアート作品が飾ってある。絵画というよりインスタレーションに近い作風で、明らかにセザンヌや同時代の画家とは無縁の作品である。受付で質問したところ、アーティストが申請をすれば自作の展示が許可

されるらしい。特にMP2013に関連した企画というわけではなく、随時受け付けているとのこと。セザンヌの聖地とでもいうべき場所に飾ってもらえるとは、アーティスト冥利に尽きるといえよう。

ちなみに、セザンヌは日本でも人気が高いためか、アトリエには日本人観光客も頻繁に訪れるらしく、売店では図録『セザンヌのアトリエ』の日本語版も販売されていた。



エクス・アン・プロヴァンスの郊外には画家ポール・セザンヌが晩年を過ごし、亡くなる直前まで絵画制作を続けていたアトリエがある



庭はアーティストの展示場所に開放

セザンヌの愛したサント・ヴィクトワール山、今も変わらぬ景観

## (2) グラネ美術館

エクス・アン・プロヴァンスのまちなかにあるグラネ美術館は、中小規模の地方美術館。美術館の名称は、地元生まれの新古典派の画家フランソワ・マリウス・グラネ (1777~1849) に由来する。グラネ美術館は、グラネがエクス・アン・プロヴァンス市に遺贈した自作や、アングルなどフランス人画家の作品を主な収蔵品とする。同じ地元出身の画家セザンヌに対しては冷たく、彼の油彩8点が美術館のコレクションに加わったのは、1984年になってのことだという。

こうした美術館ゆえ、常設展示にはさほど食指が動かなかったのだが、ここはMP2013の主要プログラムである特別展「南仏の壮大なアトリエ (Le Grand Atelier du Midi)」の会場となっている。南仏の風景を画家にとっての広大な野外アトリエに見立て、世界中のコレクションから展示作品を集めた特別展である。1880~1960年に制作された作品の展示を通じて、フォルム(形態)と色彩に対する画家の追求が絵画表現にもたらした変革をあらわにすることを企図している。グラネ美術館の他に、マルセイユのロンシャン宮も会場としたジョイント展であり、グラネ美術館の展示「セザンヌからマティスまで」は絵画の「フォルム」を、ロンシャン宮の展示「ファン・ゴッホからボナールまで」は絵画の「色彩」を、それぞれテーマにしている。

特別展の会期は6月13日~10月13日で、視察団がエクス・アン・プロヴァンスを訪れた6月12日にはスタートしていなかったのだが、MP2013のシュノー氏の厚意により、内覧会に参加する機会を得た。セザンヌ、ルノアール、モディリアーニ、モネ、マティス、ブラック、ミロ、ピカソ、ダリなど錚々たる顔ぶれの画家たちの作品が100点以上展示されている風景は圧巻であった。

## (3) ヴァザリリ・ファンデーション

エクス・アン・プロヴァンスの中心部から少し外れた郊外に、ヴァザリリ・ファンデーションという美術館がある。オプ・アート(光学アート)の先駆者として知られるヴィクトル・ヴァザリリ(1906~97)の作品を展示する美術館である。オプ・アートは、平面に描かれた絵が立体的に浮かび上がったり、直線が曲線に見えたりといった錯視のメカニズムを利用して、鑑賞者に特殊な視覚効果を与える抽象絵画のジャンルである。

ヴァザリリ・ファンデーションは、このヴァザリリが制作した巨大なオプ・アート壁画44点を展示するために建設されたものだ。展示されるヴァザリリ作品の内容・規模が先にあって、そこから逆算して美術館の構造が決められたという印象を受ける。美術館は、六角形をした16の展示室が組み合わさったハニカム(蜂の巣)構造をしており、高さ8mに及ぶ大きな壁面にヴァザリリの絵画が一点ずつ飾られている。なお、遠目に見た印象



から「絵画」「壁画」という表現を用いたが、展示作品の素材は、金属、タペストリー、陶器、エナメル、ガラスなど多岐にわたっており、正確にはインスタレーションと称した方が適切かもしれない。この美術館は一時期休館していたが、MP2013を機にリノベーションが進み再オープンを迎えた模様である。

ちなみに、オブ・アートのブームは1960年代に隆盛を迎えた後、沈静化したとされるが、現代アートのムーブメントに着実に影響を及ぼしているとも考えられる。そのことを痛感したきっかけが、今回視察時にパリのグラン・パレで開催されていた展覧会「ダイナモ 光とムーブメントの世紀 1913-2013 (DYNAMO Un siècle de lumière et de mouvement dans l'art 1913-2013)」である。1913年から現代に至るまでの、「視覚」の可能性を追求したアーティスト約150名の作品を展示する大規模な企画展だ。直島や越後妻有、金沢21世紀美術館の展示で知られるジェームズ・タレルや、別府の「混浴温泉世界2012」に参加したアン・ヴェロニカ・ヤンセンズ、モナコの項で触れたアニッシュ・カプーアなどの作品が展示されていたほか、日本からも草間彌生、中谷芙二子が参加していた。こうした新しい作品の中に混じって、ヴァザリリのオブ・アート作品が多数展示されており、現代アートの潮流の中にヴァザリリが残した足跡を窺い知ることができた。



オブ・アート（光学アート）の先駆者、ヴィクトル・ヴァザリリの作品を展示する美術館、ヴァザリリ・ファンデーション

## 4. コート・ダジュール地方

コート・ダジュール地方のアート拠点としては、マントンのジャン・コクトー美術館、ニースのマルク・シャガール国立美術館について概観したい。

### (1) ジャン・コクトー美術館

第三章で述べたように、詩人・小説家・劇作家・評論家・画家・映画監督・脚本家としてマルチなタレントを發揮したジャン・コクトーはマントンとゆかりがあり、旧港の要塞美術館やマントン市庁舎にはコクトーの手がけた作品が展示されている。そうした中に新たに加わったのが、2011年11月に開館したジャン・コクトー美術館である。美術館のコレクションは、実業家のセヴラン・ワンダーマンがマントンに寄贈したコクトーのデッサン、版画、タペストリー、手稿など1,800点が基礎となっている。

美術館を設計したのは、マルセイユのヨーロッパ地中海文明博物館 (MuCEM) の設計者でもあるルディ・リッチオッティ。美術館の規模は、建築面積2,700㎡、地上1階・地下1階と、MuCEMに比べてごく小さいスケールである。しかしながら、ガラスを多用したフラットな壁面の外側に、屋根から百足や蜥蜴の足のような柱を下ろす構造は、MuCEMとの共通性を感じさせる。ガラスの箱を網目状のコンクリート・ファイバーの箱で覆ったMuCEMとはスタイルが異なるが、ジャン・コクトー美術館でもガラスと柱という壁面の二重構造が採用されているのだ。そして南仏の強い陽射しによって柱の影がガラス面に映りこむことで、ガラス壁と柱のはざまの回廊に幾何学的な図形が浮かび上がる。

### (2) マルク・シャガール国立美術館

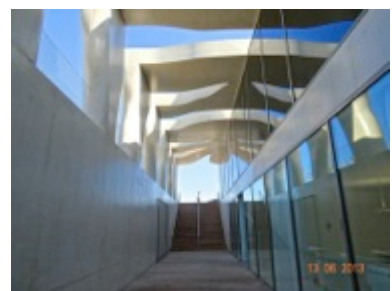
大分市美術館では、2013年10～12月に特別展として「シャガール展 愛と幻想の色彩画家」を開催した。マルク・シャガール (1887～1985) はユダヤ系ロシア人であり、パリや革命期のロシア、亡命先の米国などを転々とする中で、故郷ロシアの街並みや恋人たちなどをテーマに幻想的で色彩豊かな絵画世界を築いた作家として人気がある。

ニースには、このマルク・シャガールのために建てられた国立美術館が存在する。1966年にシャガールがフランス政府に寄贈した17点の大型宗教タペストリー「聖書のメッセージ」の展示を行うために、当時の文化大臣であ

りシャガールの友人でもあったアンドレ・マルローの肝いりで 1973 年に開館した国立美術館である。開館後もシャガールは、亡くなる 1985 年までこの美術館に自作の寄贈を続けたため、シャガール作品の収蔵点数は世界最大といわれる。開館当初は「マルク・シャガール聖書のメッセージ美術館」と呼ばれていたが、2008 年から「マルク・シャガール国立美術館」という現在の名称に変更されている。

ニース旧市街から丘を登った高台にある高級住宅地シミア地区の一角に、マルク・シャガール国立美術館は立地している。緑豊かな庭園を広く確保した敷地に低層の美術館が建つ佇まいは、少しだけ大分市美術館を思わせる。設計者のアンドレ・エルマンはシャガール本人と密に連携して、12 の壁を持つ複雑な形状の大展示室を設計し、「聖書のメッセージ」連作の常設展示に最適の空間を提供した。また、シャガールが希望したコンサートホールにはシャガールのデザインした 3 点のステンドグラス連作が飾られ、池の上にある外壁にも彼がデザインしたモザイク細工が施されている。

ちなみに今回視察時には、パリでもシャガールの特別展が開催されていた。リュクサンブール美術館<sup>10</sup>で 2013 年 2～7 月に開催された「シャガール 戦争と平和のはざま (Chagall Une vie entre guerre et paix)」展である。二度の世界大戦をはさんでロシア、パリ、ニューヨーク、南仏で活動したシャガールが、戦争と平和をテーマに描いた作品を展示する企画であったが、会場は大勢の来場者でにぎわい、シャガールの人気のほどが窺い知れた。

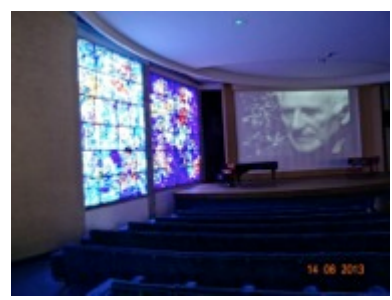


イタリア国境に近いマントンに 2011 年 11 月に開館したジャン・コクトー美術館、設計はマルセイユの Mu CEM のルディ・リッチオッティ。ガラスを多用したフラットな壁面の外側に、屋根から百足や蜘蛛の足のような柱を下ろす構造は、Mu CEM との共通性を感じさせる



コクトーのデッサン、版画、タペストリー、手稿などが展示されている

ニースのマルク・シャガール国立美術館の看板



シャガールがフランス政府に寄贈した 17 点の大型宗教タペストリー「聖書のメッセージ」の展示を中心に行うために 1973 年に開館した国立美術館である

<sup>10</sup> 1750 年創設のリュクサンブール美術館はリュクサンブール宮殿内にある小さな美術館だが、芸術作品を一般に公開したフランスで最初の美術館である。常設コレクションは現在有していないが、近年、多彩な企画展を開催することで、美術館としての評価を高めた。リュクサンブール美術館はまた、大分県の OPAM にも携わる坂茂が、2011 年にリノベーションを担当したことで知られる。坂は、歴史的建築である美術館建屋に、得意の紙管建築を用いてカフェ「アンジェリーナ」と教育用ワークショップ・ルームを付け加えたのだ。この他、美術館の受付やミュージアムショップにも紙管が多用されている。坂茂は 2013 年 7 月にも、パリ郊外セガン島に建設される、音楽を中心とした複合施設「シテ・ミュージカル」のコンペを獲得しており、フランスで人気の高い建築家となっている。



## おわりに

サグラダ・ファミリアで外尾悦郎氏の話をつき、教会とはまた異なるが、都市もまた、その成熟・完成にきわめて長い時間を要する事業だということに連想が及んだ。そうした長期のスパンを見据えた、ぶれないビジョンを地域が共有することの重要性を改めて感じた次第である。

また、機能・デザイン・象徴を常に一つの問題として解決したガウディの姿勢からも学ぶべきものは大きい。大分は、新産都の指定以来、工業都市として機能的・効率的な都市・産業を実現してきた。しかし、人口減少にとともに内需の量的拡大が難しくなる中では、デザインやシンボリックな価値という視点も融合させて、より魅力的なまちづくりや付加価値の高い産業の創造を目指していく必要がある。その際に鍵となるのが、地域活性化戦略の中核に文化を位置づける創造都市戦略を、県都大分や大分県全体が強く志向していくことである。

そうした取り組みを進める際には、長期ビジョンと同時に、もう少し短い期間と目標を具体的に設定して、さまざまなプロジェクトを計画的に実行に移していくことも必要である。1992年オリンピックに向けたバルセロナや、2013年欧州文化首都に向けたマルセイユの取り組みからは学ぶべき点が多いと感じた。もっとも、マルセイユについては、他の欧州創造都市と比べてもかなり短期間で大規模な都市改造を敢行した印象もあり、その評価については今後、検証が必要になってくるように思う。

これらの都市とは規模も状況も異なるので単純に比較するわけにはいかないが、大分でも現在、都心南北軸整備が進行しており、間もなくまちなかの風景が一変する。そうした節目の年となるのが、OPAMや大分駅ビルが完成し、別府では現代芸術フェスティバル「混浴温泉世界」が開催され、県下全域でデスティネーションキャンペーン（DC）が展開される2015年だ。そこを見据えて、大分の新しい魅力を内外に強力に発信していくための体制構築が急務である。DC開催が夏場（7～9月）なことを踏まえると「おんせん県」一本槍ではなく、プラスアルファのイメージ発信が不可欠で、大分県全体を「アート県」としてPRしていくことが有効と考える。

その際、施設やインフラというハード以上に重要なのが、人材やプログラムといったソフトである。バルセロナ・モデルが成功したのは、単に市街地に広場をつくったからではなく、その空間に主役たる市民が出てきて、商業や大道芸、街歩きなどさまざまな活動をはじめたからである。その一方で、業績をあげて地域から評価を集めていた文化施設が、それをリードしてきた優秀な館長のすげ替え一つで、先行きを危ぶまれる事態に陥るケースもある。創造的人材を育成・誘致し、彼らに活躍の場を与えることの重要性を思い知らされた。県都大分では、現代アート展「ART PROJECT OITA 2013 循環」を契機に、地元のアーティストやデザイナー、工芸作家、ミュージシャン、コスプレイヤー、ショップ経営者、建築家、学生など、若者を中心に大勢の人々がまちなかに集まってきた。こうした人材が、継続的にまちなかに関わっていける仕組みづくりが求められている。

創造都市の推進に際しては、古さと新しさのバランスをいかに考えるかも重要である。旧態依然たる状態の地域資源には多くの人々は興味を抱かず、それは人口減少社会たるわが国にあって、現状維持ではなく荒廃衰退へと直結するリスクを孕む。かといって、すべてを新たに更新・再開する財政力や内需の裏打ちはこのからの行政や地域経済に期待できない。以前からある地域資源（自然・歴史・建物など）に新たな角度（アート、リノベーションなど）から魅力を与え、付加価値を向上させる取り組みが不可欠となる。欧米の諸都市を見ても、歴史資源の豊かな街ほど、そこに新しい魅力を加えることにも貪欲だ。旧市街再生に際して現代アート・文化を導入したバルセロナ。18世紀の歴史的建築を現代建築家に委ね、世界に冠たる美術館の拡張・機能向上を図ったマドリッド。古都の街並みをまるごと舞台にして現代芸術祭を催したエクス・アン・プロヴァンス。これらの都市を見ていると、自らの歴史文化の底力に自信を持つからこそ、新たなチャレンジにも寛容なのだと思えてならない。

そうした思いを先頃、大分でも体験した。京都経済同友会が大分を視察に訪れ、意見を交換する機会があったのだが、その場での最大のテーマが現代アートなのだ。京都といえば、神社仏閣をはじめ国際級の観光資源を擁し、国内外から多くの集客を獲得している。にもかかわらず京都では現在、同友会・府・市が一体となって国際現代芸術祭「PARASOPHIA」を計画中だという。京都が、現代アートでも新たな魅力づくりに邁進し「新文化・新産業を創造し続ける京都」を目指す姿に驚かされた。しかし、そうした面では大分も引けを取らない。アジアの仏教文化を大胆に導入し自国信仰文化と化学反応を起こす一大社会実験を挙行了した六郷満山。伝統的な中世社会に南蛮文化という最新型OSをインストールした宗麟時代の府内。大分にはもともと、創造都市のDNAが眠っている。それを覚醒させ未来の活性化へとつなげるうえで、この報告書が何らかの参考となれば幸いである。

## 参考資料1 視察スケジュール

### 1. マドリード視察（スペイン）

日程：2013年6月8～9日

訪問先：プラド美術館、ソフィア王妃芸術センター、ティッセン・ボルネミッサ美術館、マタデロ・マドリード、  
チュエカ地区、アトーチャ駅舎、マドリード・リオ

対応者：現地ガイド

### 2. バルセロナ視察（スペイン）

日程：2013年6月9～10日

訪問先：サグラダ・ファミリア、カサ・ミラ、グエル公園、ラバル地区（バルセロナ現代美術館、バルセロナ現代文化センター、ランブラ・ラバル、サン・ジュセップ市場）、ランブラス通り、22@、ラス・グロリアス・カタラナス広場（アグバル・タワー、バルセロナ・デザイン・ハブ、蚤の市「エンカンツ」会場、LRT）、カンブ・ノウ、カイシャ・フォーラム

対応者：サグラダ・ファミリア 主任彫刻家 外尾悦郎氏  
ブックデザインオフィス「spread」編集者 坂本知子氏  
現地ガイド

### 3. プロヴァンス地方視察（フランス）

日程：2013年6月11～12日

訪問先：マルセイユ：旧港地区、メゾン・ディアマンテ（マルセイユ・プロヴァンス2013本部）、パビヨンM、J1、ヨーロッパ地中海文明博物館（MuCEM）、ヴィラ・メディテラネ、プロヴァンス視点美術館、PACA地域圏現代美術基金センター（FRAC）、LRT  
エクス・アン・プロヴァンス：グラネ美術館、セザンヌのスタジオ、ミラボー通り、その他旧市街、ヴァザルリ・ファンデーション

対応者：マルセイユ・プロヴァンス2013 副社長 ウルリッヒ・フックス（Ulrich Fucks）氏  
同 国際関係コーディネーター ジュリア・シュノー（Julie Chénot）氏  
現地ガイド

### 4. コート・ダジュール地方視察（フランス）

日程：2013年6月12～14日

訪問先：カンヌ：ミニトレイン乗車、クロワゼット大通り、パレ・デ・フェスティバル・エ・デ・コングレ、シユヴァリエ山、その他旧市街

エズ：鷺の巣村

モナコ：モンテカルロ地区、その他旧市街

マントン：ジャン・コクトー美術館

ニース：ミニトレイン乗車、プロムナード・デザングレ、城跡、LRT、その他旧市街、マルク・シャガール国立美術館（シミエ地区）

対応者：現地ガイド



## 参考資料2 視察参加者名簿

※順不同・敬称略、役職は視察当時のもの

氏名	役職
団長 小手川 強二	フンドーキン醤油(株) 代表取締役社長
小手川 映子	同夫人
尾野 文俊	鬼塚電気工事(株) 代表取締役社長
尾野 唯子	同子女
三浦 宏樹	(株)日本政策投資銀行 大分事務所 所長
板井 良助	(有)但馬屋老舗 代表取締役社長
板井 靖良	同子息
角山 光邦	(株)角山商店 取締役社長
長野 景一	大分合同新聞社 取締役副社長
野田 鉄郎	全日本空輸(株) 大分支店 支店長
橋本 均	(株)マリーンプレス 代表取締役社長
馬場 ヒロ子	日本連合警備(株) 代表取締役社長
徳永 淳一	大分リース(株) 本社営業部 部長
宮内 裕和	府内産業(株) 代表取締役社長
添乗員 井上 博道	(株)JTB九州 大分支店



## 参考資料3 主要参考文献

- 阿部大輔 2009 『バルセロナ旧市街の再生戦略 公共空間の創出による境界の回復』学芸出版社
- 阿部大輔 2012 「情報通信産業の集積を通じた旧工業地域の再生への試み—バルセロナ・ポブレノウ地区の 22@BCNプロジェクトを事例として—」(龍谷大学『龍谷政策学論集 第1巻第2号』)
- 阿部大輔 2014 「バルセロナ ある地中海都市の躍進」(『季刊まちづくり 41』学芸出版社)
- 大分経済同友会 2010 『提言 県都大分の交通体系について』
- 大分経済同友会 2011a 『フランス・ドイツ経済事情視察報告書 ～交通とアートのまちづくりを考える～』
- 大分経済同友会 2011b 『提言 県立美術館整備の方向性 ～クリエイティブな美術館&都市づくりに向けて～』
- 大分経済同友会 2011c 『提言 県立美術館整備の方向性 II ～創造都市実現のための処方箋～』
- 大分経済同友会 2012 『提言 大分都心南北軸整備の方向性について ～アートと交通のまちづくりに向けて～』
- 大分経済同友会 2013 『欧州アート・交通まちづくり視察報告書 ～創造都市に大分の未来を見る～』  
(大分経済同友会の提言や視察報告書はウェブサイトよりダウンロードできます [http://http://www.oita-doyukai.jp/](http://www.oita-doyukai.jp/) )
- 太下義之 2008 「創造都市バルセロナの文化政策～文化と経済が共に発展するための戦略～」(三菱UFJリサーチ&コンサルティング『季刊 政策・経営研究 2008 vol.1』)
- 岡部明子 2003a 「公共空間を人の手に取り戻す 欧州都市再生の原点」(宇沢弘文・薄井允裕・前田正尚編『都市のルネッサンスを求めて—社会的共通資本としての都市1—』東京大学出版会)
- 岡部明子 2003b 『サステイナブルシティ EUの地域・環境戦略』学芸出版社
- 岡部明子 2005 「都市再生「バルセロナ・モデル」の検証」(福川裕一・矢作弘・岡部明子『持続可能な都市—欧米の試みから何を学ぶか—』岩波書店)
- 岡部明子 2010 『バルセロナ 地中海都市の歴史と文化』中央公論新社
- カーサ ブルータス『カーサ ブルータス 2012年9月号 THE BEST MUSEUMS 2012』
- 佐々木雅幸 2006 「創造都市の世紀へ」(端信行・中牧弘充・NIRA編『都市空間を創造する 越境時代の文化都市論』日本経済評論社)
- 外尾悦郎 2006 『ガウディの伝言』光文社
- 田澤耕 2013 『カタルーニャを知る事典』平凡社
- 鳥海基樹 2014 「マルセイユ 斜陽都市を欧州文化首都に押し上げる都市デザイン」(『季刊まちづくり 41』学芸出版社)
- 吉本光宏監修・国際協力基金編 2006 『アート戦略都市—EU・日本のクリエイティブシティ』鹿島出版会
- Ajuntament de Barcelona 2011 『22@Barcelona 10 anys de renovació urbana / 10 years of urban renewal』
- Cushman & Wakefield 2010 『European Cities Monitor 2010』
- Michel Fraissset (刊行年不詳) 『セザンヌのアトリエ』aux arts etc.
- Carlos Giordano, Nicolas Palmisano 2012 『ビジュアルガイド アントニ・ガウディの全作品』Dos de Arte Ediciones
- Marseille-Provence 2013 『Marseille-Provence 2013 — European Capital of Culture — Programme』
- Musée national Marc Chagall 2012 『マルク・シャガール国立美術館 ニース 見学ガイド』artlys
- Museo Nacional Centro de Arte Reina Sofía 2013 (三訂版) 『The Collection Museo Nacional Centro de Arte Reina Sofía Keys to a Reading (Part I・II)』
- Museo Nacional del Prado 2011 (改訂版) 『プラド美術館ガイドブック』
- Museo Thyssen-Bornemisza 2012 『ティッセン・ボルネミッサ美術館 美術館案内 (簡略版)』
- Museu d'Art Contemporani de Barcelona 2003 『MACBA COLLECTION itinerary』







問い合わせ先: 大分経済同友会  
〒870-0021 大分市府内町3丁目4-20 大分恒和ビル3F  
電話 : 097-538-1866 E-mail : info@oita-doyukai.jp  
[http:// http://www.oita-doyukai.jp/](http://www.oita-doyukai.jp/)